

山形西高敷地内遺跡

第5次発掘調査報告書

1993

山形県教育委員会

山形西高敷地内遺跡

第5次発掘調査報告書

平成5年3月

山形県教育委員会

序

本書は、平成4年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した山形西高敷地内遺跡第5次発掘調査の成果をまとめたものです。

山形西高敷地内遺跡は山形県のほぼ中央に位置する山形市にあります。

現在、生徒の学び舎となっている県立山形西高等学校の敷地は、縄文・弥生・古墳・奈良・平安・江戸時代の人々が生活の場として選び利用していたところです。奥羽山脈を背にして、馬見ヶ崎川が形成した豊かな扇状地の先端であるこの地を、各時代の人々はこよなく愛していたことが伺い知れます。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様の御理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査において御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成5年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

1 本書は山形県立山形西高等学校創立90周年記念事業実施委員会の委託を受けて、山形県教育委員会が平成4年度に実施した上記記念事業に係わる山形西高敷地内遺跡の第5次発掘調査報告書である。

2 発掘調査は平成4年8月17日から同年9月14日までの延べ22日間行った。

3 遺跡の所在地は、山形県山形市鉄砲町1丁目15-46である。

4 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治

主任調査員 佐藤庄一 佐藤正俊

調査員 水戸弘美

事務局 事務局長 深瀬征二

事務局長補佐 鈴木常夫

主任調査員 野尻侃

主任事務員 永井健郎

事務局員 渋江正義

5 発掘調査にあたっては山形県立山形西高等学校創立90周年記念事業実施委員会、山形県立山形西高等学校、山形県東南村山教育事務所、山形市教育委員会など関係機関に御協力を得た。

6 本書の作成・執筆は佐藤庄一、水戸弘美が担当した。編集は安部実、伊藤邦弘が担当し、全体を佐々木洋治が総括した。

7 現地調査と報告書の作成にあたって、阿子島功氏、吉田洋一氏から御指導をいただいた。また、阿子島功氏、吉田由美子氏から玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りで、第4次調査例を踏襲している。
遺構・遺物番号は各次調査毎に付している。図面上で混乱を来すような際は、遺構番号の前に調査次名を記す。5 S T 2は第5次調査2号竪穴住居跡を指す。

S T…竪穴住居跡	S G…河川跡	S D…溝跡	
S K…土坑	S X…性格不明遺構	S P…柱穴	
E L…炉・カマド跡	E P…住居跡に伴う柱穴	E U…埋設土器	
R P…登録土器・土製品	R Q…登録石器・石製品	P…土器	S…石

- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆の基準は下記の通りである。
 - (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
 - (2) グリッドの南北軸は、N-15°-Eを測る。
 - (3) 遺構実測図は1/60・1/250・1/600他の縮図で採録し、各縮図毎スケールを付した。
 - (4) 遺物実測図・拓影図は、1/3・1/4を原則とし、おのおのスケールを付した。
ただし、縄文土器の文様展開を示す拓影図には、スケール任意のものがある。黒ベタは須恵器を表す。拓影図は断面図の左に外面、右に内面を提示している。
 - (5) 遺物観察表中の計測値欄の()数値は図上復元による復元値を示す。出土地点欄の「G」はグリッドを示す。層位では「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を示す。分類は第4次調査例を踏襲している。
 - (6) 遺構観察表中の遺構間の矢印は重複の旧→新の関係を示す。
 - (7) 遺物図版については、土器・陶磁器は1/3、打製石器・磨製石器は1/2、砾石器・土製品は1/4で採録している。
 - (8) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版とともに共通したものである。
 - (9) 遺構覆土の色調・遺物観察表の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に掲った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	1
II 遺跡の概観	
1 立地と環境	2
2 基本層序	3
3 遺構の分布	3
III 遺構と遺物	
1 縄文時代	10
2 弥生時代	11
3 古墳時代	11
4 奈良・平安時代	12
IV まとめ	
1 遺跡の性格と年代観	30
2 山形西高敷地内遺跡の複式炉	31
主な参考文献	32
付編	卷末
「山形西高敷地内遺跡の立地環境」	

表

表 1 縄文時代土坑観察表	19
表 2 縄文時代住居跡観察表	20
表 3 遺物観察表	27
表 4 石器計測表	29

挿 図

図 版

第1図 遺跡位置図	2	図版1 調査区全景・下層完掘状況
第2図 調査概要図	4	図版2 嵌入式風景・トレンチ調査作業状況
第3図 上層遺構配置図	5	表土除去実施状況・C区調査状況
第4図 下層遺構配置図	7	図版3 基本層序ST2北壁、a-a'・b-b'
第5図 基本層序	9	図版4 C区西壁土層断面
第6図 C区平面図	13	図版5 D区・E区土層断面
第7図 D区平面図	15	図版6 A区下層・B区上層遺構検出状況
第8図 ST41~43・45・47 ・50・62、SX48平面図	17	図版7 ST1住居跡・EL22カマド ST2住居跡完掘・SK3土坑埋土状況
第9図 ST52・53・59 SK54・55平面図	19	図版8 B区IV層面までの掘り下げ状況 B区IV層面検出状況
第10図 遺物実測図(1)	21	図版9 B区下層
第11図 遺物実測図(2)	22	図版10 C区・D区完掘状況
第12図 遺物実測図(3)	23	図版11 E区完掘状況・旧河道掘り下げ状況
第13図 遺物実測図(4)	24	図版12 ST41・42・50住居跡・EL60炉跡 SK49土坑半截・完掘状況
第14図 遺物実測図(5)	24	図版13 ST43住居跡・EL44炉跡 ST45・47住居跡完掘状況
第15図 ST1・2、SK3 4・7~9平面図	25	図版14 SX48落ち込み完掘状況 ST53・59住居跡完掘状況
第16図 遺物実測図(6)	25	ST13住居跡・RP1遺物出土状況 ST15・16・17住居跡完掘状況
第17図 遺物実測図(7)	26	図版15 ST21・ST18住居跡完掘状況 SK26・27・28土坑埋土状況 EU16出土状況・旧河道掘り下げ状況 C区調査・D区記録作業状況 現地説明会風景
第18図 複式炉の変遷図(1)	32	図版16 遺物(1)
第19図 複式炉の変遷図(2)	33	図版17 遺物(2)
		図版18 遺物(3)
		図版19 遺物(4)
		図版20 遺物(5)
		図版21 遺物(6)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

本遺跡は、山形市鉄砲町1丁目の山形県立山形西高等学校の敷地一帯にある。昭和51年1月に校舎を改築するための基礎工事を行った際、地下1.5mから縄文時代中期の土器片が発見され、遺跡（埋蔵文化財包蔵地）として登録されている。

調査は、校舎の改築や整備に伴って、昭和51年に第1次・第2次調査、昭和59年に第3次調査、平成元年に第4次調査が実施されている。その結果、縄文時代中期・晩期、弥生時代中期と古墳時代前期、および奈良時代から平安時代の遺構と遺物が確認され、県内でも有数の密集度の高い複合遺跡であることが確認されている。

県立山形西高等学校の創立90周年記念事業に伴い、敷地内の西側に同窓会館を建設することが計画された。工事により遺跡の一部が破壊される恐れがあるため、各関係機関との協議が重ねられ、第5次調査を実施する運びとなった。平成4年度、県教育委員会が主体となって、記録保存を目的とした現地調査が行われた。

2 調査の概要

現地調査は平成4年8月17日から平成4年9月14日までの実働22日間行った。今回の調査区は、同窓会館建設工事によって、遺跡が破壊されると考えられる範囲に設定している（第2図）。調査区北側は、同窓会館がビロティとなるため遺跡に影響する基礎部分のみを、調査区南東側は、第2次調査で弥生・古墳時代の生活面までの調査を行っているため、縄文時代中期の生活面だけを調査の対象としている。調査面積は744m²である。

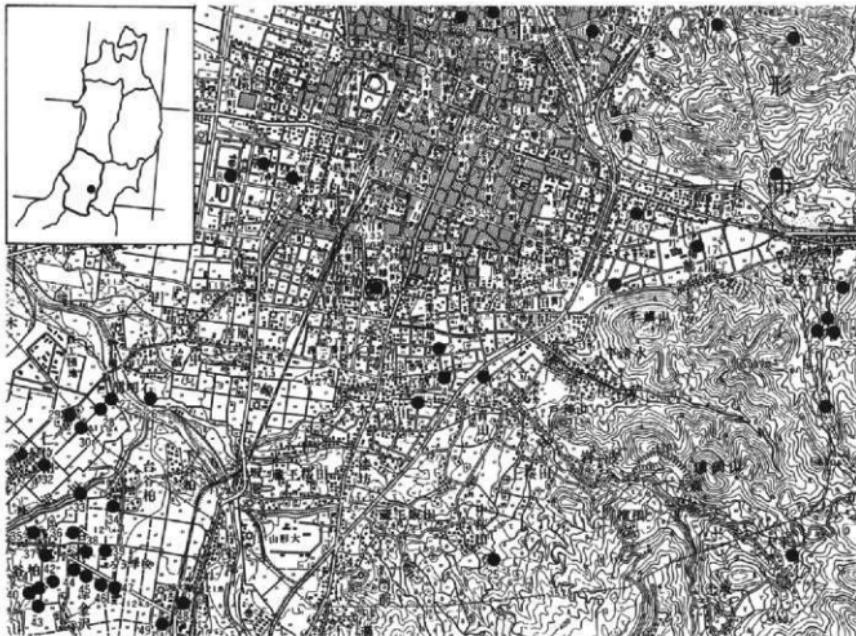
調査の開始にあたり、第4次調査を踏襲した2×2m単位とするグリッドを設定した。グリッドの南北軸は、磁北から東に15°傾く。トレンチ掘りで層序の確認を行った後、重機を用いて、奈良・平安時代の遺構検出面までの掘り下げを行った。面整理・遺構検出・遺構精査・記録の工程で調査を進めた。奈良・平安時代の遺構の調査終了後、人力で古墳時代の遺構検出面までの掘り下げを行った。面整理の結果、明瞭な古墳時代の遺構が検出されなかったため、続けて縄文時代の遺構検出面までの掘り下げを人力で行った。縄文時代についても、奈良・平安時代の遺構と同じ工程で調査を進め、調査成果がまとまった段階で現地説明会を開催した。現地調査の主な進行状況は、下記の通りである。

- 8月17日 機材搬入 鋼入れ式 環境整備 調査区設定
- 8月18日 トレンチ調査開始（～8月19日）
- 8月20日 重機による表土除去開始（～8月21日）奈良・平安時代面整理開始（～8月21日）
- 8月21日 奈良・平安時代遺構精査開始（～8月28日）
- 8月31日 古墳時代遺構検出面までの掘り下げ開始（～9月2日）
- 9月2日 古墳時代面整理 縄文時代遺構検出面までの掘り下げ開始（～9月3日）
- 9月3日 縄文時代遺構精査開始（～9月12日）
- 9月11日 現地説明会（参加155名）
- 9月14日 機材搬出 環境整備

II 遺跡の概観

1 立地と環境

山形県の東寄りほぼ中央に所在する山形盆地は、南北約40km、東西約12km、約400km²の面積を有する。北は袖崎丘陵で尾花沢盆地と、南は蔵王火山の泥流で上山盆地と画されている。西方に朝日山地、東方に奥羽山脈がそびえ、夏のフェーン現象、冬の降雪を引き起こす原因となっている。奥羽山脈を源にする河川が、扇状地を発達させながら盆地を東から西に横断し、盆地中央を北流する最上川に注ぎ込んでいる。その中でも、馬見ヶ崎川は扇状地を特に発達させ山形市のほぼ中央を西流している。馬見ヶ崎川扇状地に見られる遺跡



番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	山形市高森地内 黒 苏 路	#	後世・古墳・平安	18	西 の 草 市 路	跡	後文	35	茶 平 田	田	後文
2	東 城 駅 城 駅 駅道・官道	#	後世	19	秋 湿 宮 墓	#	平安	36	苗 田	田	#
3	青 田 駅 駅 地	官道・平安	#	20	妙 足 寺 宮 墓	#	平安	37	谷 駅 丁	田	#
4	松 見 町	#	後文	21	# B	#	#	38	武 田	田	後生・古墳・平安
5	永 大 ハクス裏 金 墓	#	#	22	千 壱 駅 敷	#	#	39	谷 駅 通	通	古墳・奈良・平安
6	五 日 町 古 墓	礎	奈良	23	妙 足 寺 C	#	#	40	谷 通 吉 墓 群	古 墓	#
7	後 代 金 里 条	里	平安	24	八 茅	#	#	41	高 橋 田	田	後生・平安
8	五 日 町 敦 有 地	奈良	#	25	中 板 田	#	#	42	石 田	田	後生・平安
9	官 町 三 小	#	平安	26	吉 須 通 内 城 間 路	跡	奈良・宝町	43	高 橋	跡	#
10	高 須 寺 三 中	#	奈良・平安	27	高 ケ 囲 敷	奈	奈良・平安	44	石 田 通 Y	通	後生
11	新 田	#	後文	28	路	#	古墳・奈良・平安	45	石 田 通	通	古墳
12	に キ ゃ く じ 金 落 路	#	#	29	上り島下り丸山	古	奈良	46	風 沙 門	通	#
13	大 駅 敷 有 地	#	#	30	前 明 石	古墳・後地跡	#・平安	47	花 田	田	後生
14	小 白 田 向 山	#	古墳	31	寺	古墳・後地跡	#・平安	48	片 谷 地	地	平安
15	三 清 院 城 駅 駅 駅	#	#	32	二 佐 田	#	後生・奈良・平安	49	根 手 区	区	後文・古墳・奈良・平安・根室・宝町
16	鶴 山 金 落 路	#	#	33	本 四 用	#	後文				
17	鶴 / 金 落 路	#	#	34	立 力 寺 南	#	#				

第1図 遺跡位置図(S=1:50,000)

の在り方は、当地における遺跡分布の時代性をよく示している。縄文時代は扇頂から扇外部に散在し、古墳時代以降扇端および周辺に広がりを見せる。弥生時代については判然としないが、古墳時代の在り方や墳田遺跡の状況から扇端部分に埋没している可能性が高い。山形市の中心部をなす山形城の城下町は、扇外部湧泉帯に営まれ、現在の市街地の広がり方とほぼ重なる。その中央を羽州街道が南北に走る。

山形西高敷地内遺跡は、山形市市街地南辺、JR山形駅から南に約1kmに所在する。宅地に囲まれた山形県立山形西高等学校の敷地を中心に認められる。馬見ヶ崎川扇状地扇外部から扇端に位置し、標高約134mを測る。

2 基本層序

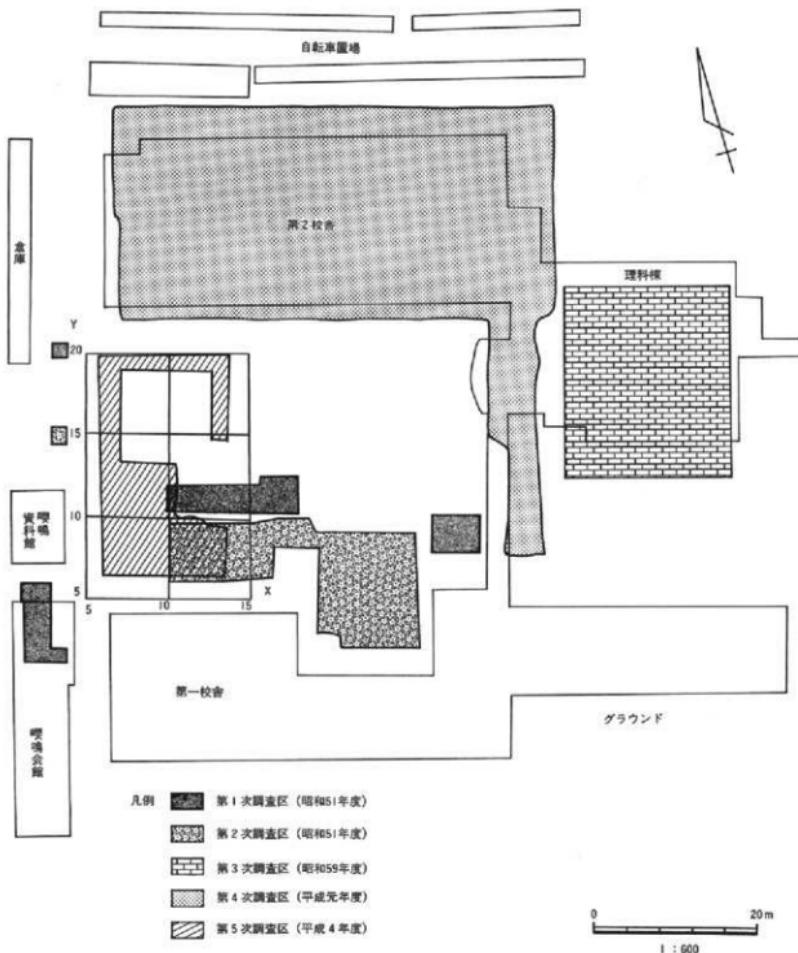
山形西高敷地内遺跡第5次調査における基本層序は、下記のIからVIIで示すことができる。これまでの調査と比して、時代毎の分層が一部不可能であることや間層の入り方に違いが認められたため、便宜的に第5次調査独自の層番号を付している。土層の堆積状況は1~4次調査と基本的に同じであると理解し、第4次調査の層序とも対応させて表記する。土層断面図では、明瞭な間層となっているV層を粗砂目、基盤層を示すVII層を縦縞、河川の堆積層を細砂目のスクリントーンで表示している（第5図）。

I 旧校舎整地層・旧工場搅乱層	第4次調査I層
II 旧耕作土（黒褐色粘土）	第4次調査II層
III 奈良・平安時代包含層（黒・暗褐色粘土、黒・暗褐色砂）	第4次調査V層
IV 弥生・古墳時代包含層（黒・黒褐色粘土質シルト）	第4次調査VII層
V 間層（黒・黒褐色粘土、黒褐色砂）	第4次調査VIII層
VI 縄文時代包含層（黒褐色粘土・細砂・細礫・中疊）	第4次調査IX層
VII 地山（暗褐色粘土質細砂、赤褐色砂質シルト、疊）	第4次調査X層

3 遺構の分布

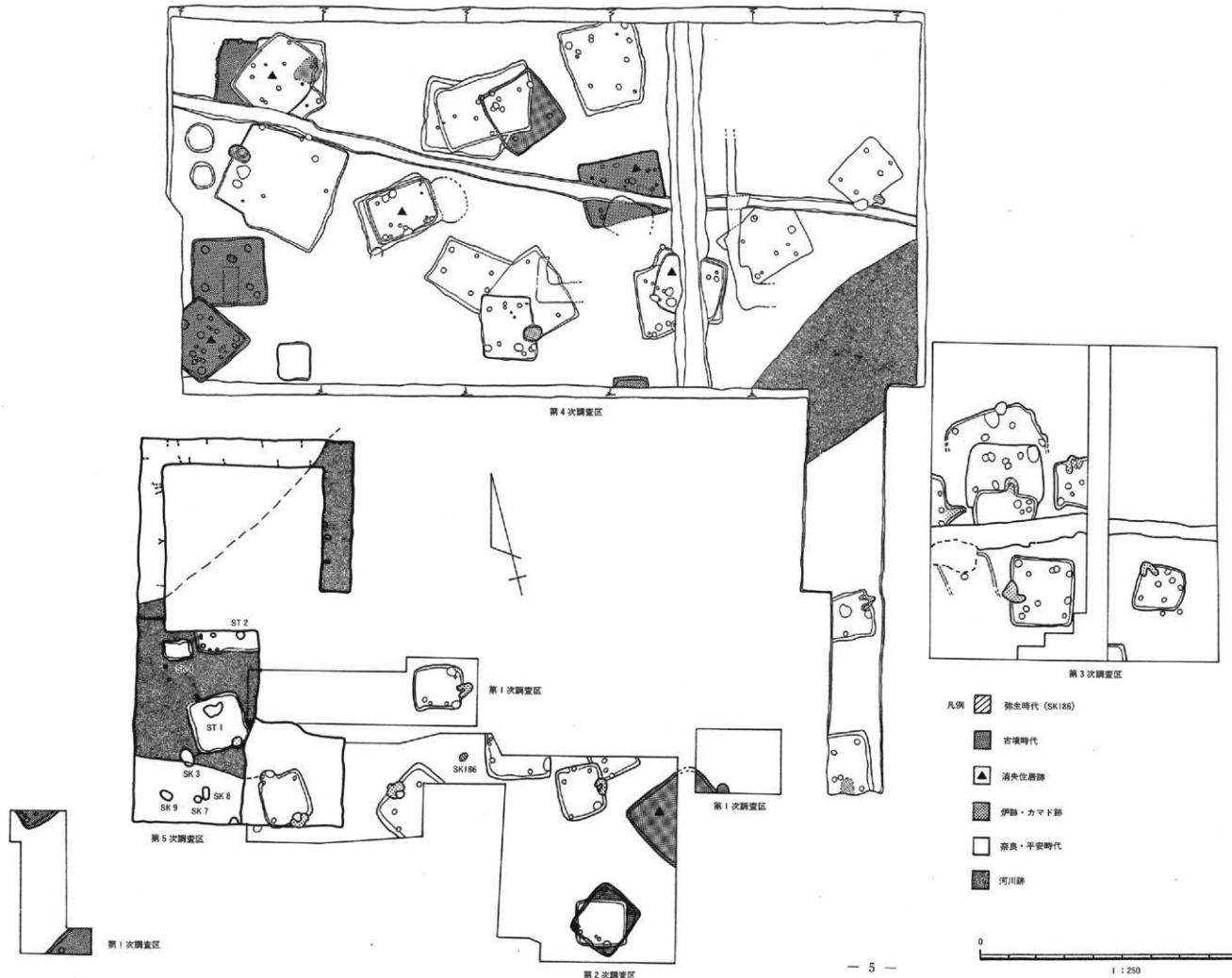
調査区全体において、工場・校舎による搅乱が激しく、I層が厚く堆積し、II・III層も部分的にしか確認することができない。搅乱層から近世の遺物が出土するため、第4次調査III層が今回の調査区にも広がっていた可能性が高い。奈良・平安時代の遺構は、III層下面で検出することができる。ST1住居跡が河川跡の堆積土を掘り込んでいること、III層が河川跡の堆積土を覆うように認められることから、奈良・平安時代には河川は流路を変えていたものと判断される。古墳・弥生時代の遺物を含むIV層は河川跡の堆積土の下位に潜り込むように堆積している。河川跡中央部に緩やかに傾斜する堆積状況を示し、今回の調査区南側には平坦面が認められず、古墳・弥生時代の遺構は検出されていない。IV層下位には、約10~40cmの厚さで無遺物層の粗砂V層が堆積する。その状況から、河川の洪水による短期間の堆積と考えられる。この無遺物層に守られるように、縄文時代の包含層VI層が存在し、VI層下面で縄文時代中期の遺構を検出することができる。

平面的な遺構の分布も、扇状地特有の土壤形成が大きく左右しているものと考えられる。第4・5次調査で確認されているような河川は、扇状地を縫うように数多く流れているも

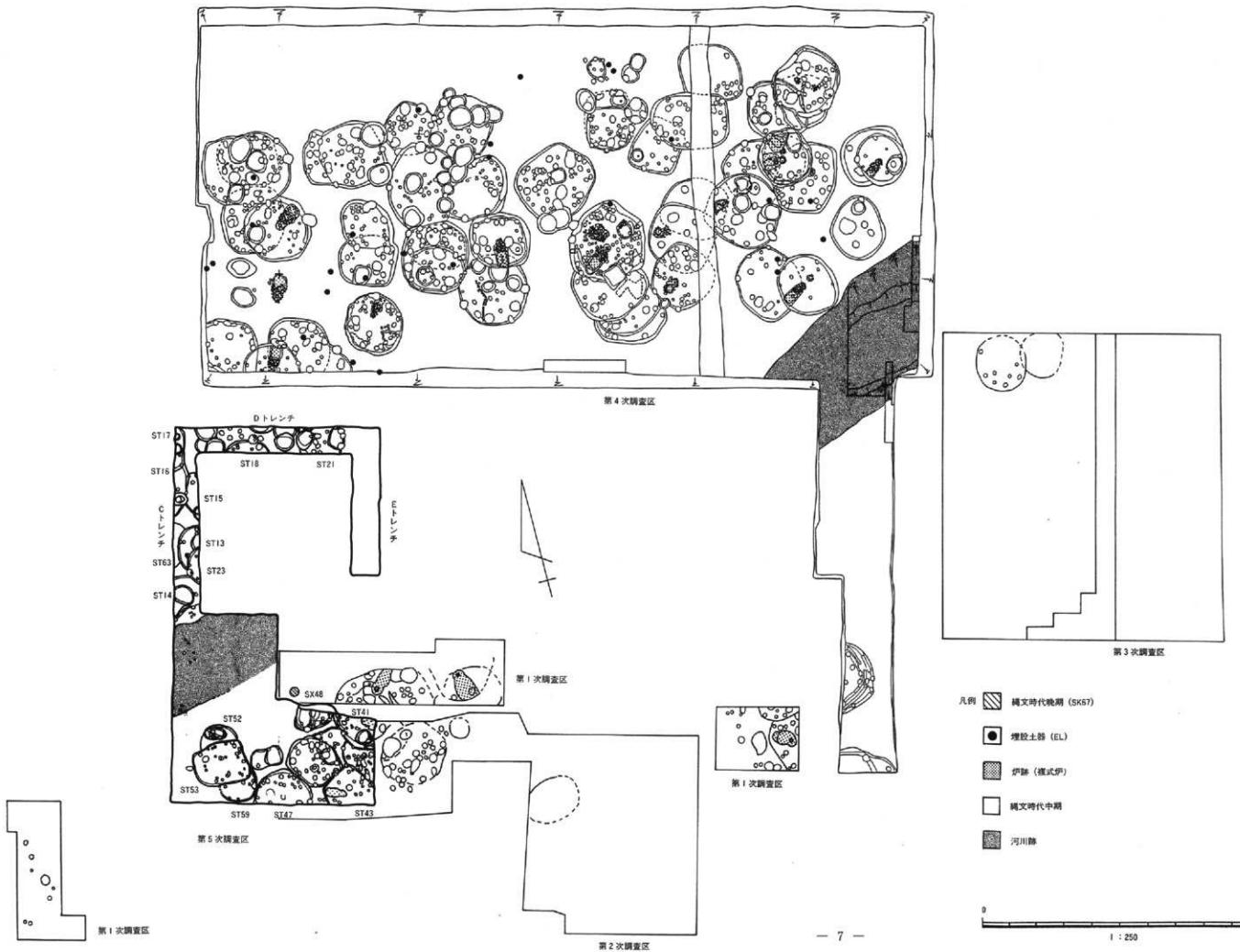


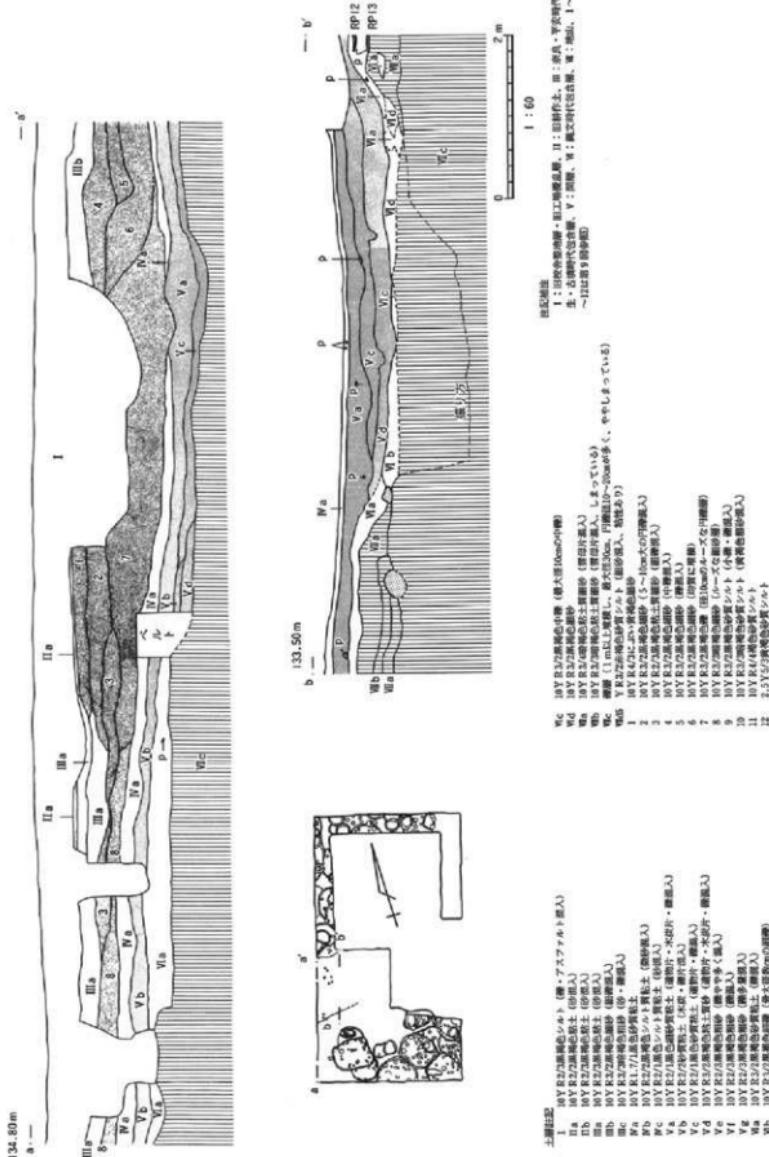
第2図 調査概要図

のと思われる。遺構は、河川をはじめとする地理的条件に規制され分布を示すと推定される。前述のとおり第4次調査に引き続き検出された河川跡は、奈良時代には埋没しており、古墳・弥生時代には落ち込み状の地形を示していたと観察される。河川跡には少量の縄文土器は含まれるが捨て場等に利用した痕跡は認められない。縄文時代の集落が存続した時期に、河川が流れを伴っていたのか今回の調査でも確認するに至っていない。ただし、奈良・平安時代の遺構が第1～5次調査区のほぼ全面で認められているのに対し、縄文時代中期の遺構は、河川跡の北側と南西部に集中し、南東部に希薄である。河川の流路の変化に規制されてのことと理解したい。



第3図 上層造構配図





III 遺構と遺物

1 繩文時代（第6～13図）

検出された遺構には、竪穴住居跡・土坑・埋設土器・河川跡がある。

第4次調査において、竪穴住居跡が河川跡北側に密集して検出されている。今次調査は、面的に限られているものの、河川跡の流路方向を確認することができた。さらに、竪穴住居跡が河川跡に沿うように北西側にまとまっており、第4次調査からの集落の広がりを理解することができる。各々の竪穴住居跡は2から3棟の重複を示し、第4次調査の在り方とも類似する。一方、河川跡南側では、これまでの調査で検出された遺構が少なく、判然としない部分が多くあった。今次調査において、第1次調査で検出されている竪穴住居跡が重複関係を持ちつながることが分かった。集落は河川跡の両岸に広がることが推定される。

河川跡は、5～10～10～17グリッドで、長さ9.2mにわたり検出された。幅5.3m、深さ0.2m以上を測る。縄文時代包含層の黒褐色砂質粘土～中層が窪地にレンズ状に堆積する（第5図）。遺物は、少量の流れ込みが認められるのみである。8～13グリッドにおいてS T14・S K58の南側の立ち上がりが、古墳・弥生時代の包含層黒褐色砂質粘土（IVa）の堆積で認められない。また、その上位には疊を混入する黒褐色細砂が堆積する。縄文時代には集落の立地を規制するように流れていた河川が、弥生時代以降、縄文時代の遺構を削り取るように流路を変えていることが読み取れる。

竪穴住居跡は、19棟検出されている。形状・規模・炉の構造・重複の在り方等、第4次調査で検出されている竪穴住居跡と類似する。土坑は12基検出されている。各竪穴住居跡・土坑については、観察表に記す。

埋設土器（E U16）が、8～20Gにおいて1基検出されている。北側壁面で住居跡（S T19）の覆土を確認していること、埋設土器周辺に柱穴が検出されていることから、住居に伴う可能性がある。掘り方は、径45cm、深さ36cmを測り、ほぼ正位で埋設されている土器と変わらない大きさである。第4次調査においても、埋設土器が住居跡の集中と重なるように点在し、26基確認されている。そのほとんどが、地文に縄文ないし撫糸文を施している粗製土器であったが、E U16も同様で撫糸文の施文だけである。

遺物は、土器・土製品・石器があり、遺構の覆土からの出土が主である。各遺物については観察表に譲る。土器には、深鉢形土器・浅鉢形土器・小型深鉢形土器・台付鉢形土器・小型台付鉢形土器・注口土器・壺形土器がある。S T43では、複式炉E L44の埋設部に沈線文様の縱方向展開のアルファベット文を持つ深鉢形土器（11-11）が埋設されている。複式炉石組部覆土からは文様の線描が隆帯の棱線を持ち、横方向の文様展開を示す浅鉢形土器（11-14）が出土している。さらに、S T43覆土からは、ヒレ状突起への隆帯の変遷が理解できる注口土器（11-15）が出土している。これらは、第4次調査において明らかにされた大木10式土器の古段階から新段階への変遷を裏付ける資料と理解される。土製品には、円盤状土製品・円錐状土製品（12-9）がある。石器には、打製石器として石匙（10-26、

11-23)、スクレイバー (11-17、12-24・25)、磨製石器として磨製石斧 (10-8・33)、礫石器として磨石、凹石、敲石、石皿がある。

2 弥生時代 (第8・13図、遺物番号は13図中のものである)

弥生時代の遺構は、調査区南東で検出された落ち込み遺構 (S X 48) 1基のみである。北側が未発掘になっているが、平面形が不整円形を呈し、大きさは東西径2.53m、南北径1.60mを測る。覆土は6層に分かれ、3層から弥生土器片が少量出土する。当初堅穴住居跡の可能性を考えたが、壁や床面がはっきりしないため、性格不明の落ち込みとする。

弥生時代の土器は小破片がほとんどで、全体の器形が復元できるものはない。破片からの推定であるが、確認できた土器の器種には、壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高壺形土器の4種がある。

壺形土器は、壺状の口縁部からやや取縮する頸部を経て、胴部が丸みをもち、胴部下半に最大径を有する器形が想定される。壺状の口縁部にはミガキ(9)、頸部から胴部上半にかけては2条1描の半截竹管状工具による横線文(9・13)、渦巻文(10~12・14)、連弧文(15・17)、重三角文(16・18・23)、重菱文(26)等が施されている。壺形土器は、口・頸部が長く直立するもの(2・28)と、口縁部が「く」字状に外反し胴部中位に最大径をもつもの(22)の二者がある。鉢形土器は、口縁部が外反し、頸部から胴部にかけて丸みをもつもの(5~7)と、口縁部が真っすぐに立ち上がるもの(1・3・4・24・25・27)の二者がある。明瞭な蓋形土器は認められない。高壺形土器は、脚部が1点(8)出土している。底部片が2点出土しているが、器種は20が鉢形土器、21が壺形土器と思われる。2・20の底部には布目压痕を有する。

これらの土器群は、2条1描の半截竹管状工具による平行沈線を特徴とすることから、東北地方南半では弥生時代中期末葉にあたる桜井式土器に併行するものである。

3 古墳時代 (第14図、遺物番号は14図中のものである)

今回の調査では調査区がせまいこともあり、古墳時代の明確な遺構は検出できなかった。

古墳時代の遺物は、調査区南半を主とする第IV層および第V層の遺物包含層から、土師器が少量出土している。

確認できた古墳時代の土師器の器種には、壺・壺・高壺・器台の4種がある。壺は、口縁部が外反し、体部が球形に膨るもので、頸部内面に粘土の折り返しによる接合が認められる(1)。3は壺の底部片である。5の壺は、内外面の体部上位に經いくびれをもち、体部下半から底部にかけて丸味を有する、丸底の壺とも呼べるものである。摩滅が著しく、内外面の調整手法は不明である。高壺は脚部が1点出土している(4)。脚部は下方に向って大きく開くもので、裾部の屈曲はほとんどみられない。外面に丁寧なヘラミガキ調整、裾部内面にヘラナデ調整が施されている。器台は、受け部が1点出土している(2)。受け部は口縁が軽く内湾するもので、脚部との接合状況はわからないが、おそらく底に孔があると思われる。

これらの土器群は、器形や調整技法等から、東北地方南半では古墳時代前期の塙釜式土

器の後半頃に併行するものと思われる。

4 奈良・平安時代（第15～17図）

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡が壁面の観察結果で確認されたものも含めて8棟土坑5基が検出されている。竪穴住居跡等の遺構が旧河道を掘り込んで作っていることから、この時期には旧河道が埋まっていたことがわかる。本節では順に遺構の概要および出土遺物について記述する。

S T 1 住居跡は、調査区南西部で検出された隅丸方形の住居跡である（第15図）。大きさは東西径3.73m、南北径3.77mを測り、南東隅にカマドを有する。住居跡は旧河道の覆土を掘り込んで作られており、床面から壁上面までの深さは20～25cmある。壁の立ち上がりはなだらかで、貼床等は認められない。住居跡北側中央に径1.3m程の楕円形の落ち込み（E K 6）がある。カマド（E L22）は直径20cm程の円窓を袖部の芯に利用しており、内部が赤く焼けている。煙道は認められなかった。

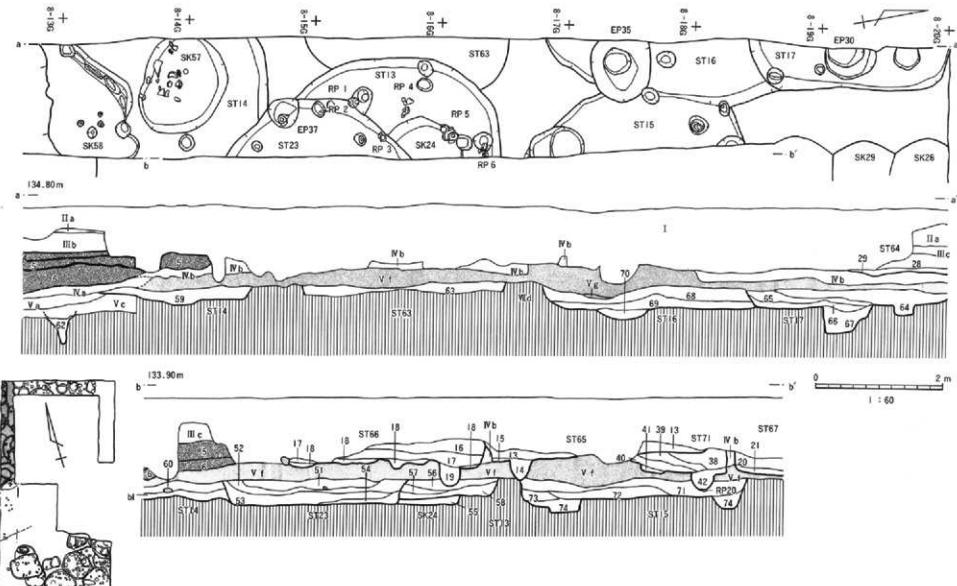
覆土は大きく3層に分かれ、遺物はカマド内から土師器壺（16-2）・同甕（17-5・7～9）、覆土中から土師器壺（16-1）、同甕（17-6）、須恵器壺（16-3～7）、同高台付壺（16-8）、同蓋（16-9）、同甕（17-3）、同甕（17-1・2・4）等が出土している。

須恵器の壺類は、（a）底径が大きく、底部の切り離しが、縫切りのもの（16-3・8）、（b）底径が大きく、底部の切り離しが糸切りの後、窓削りがなされているもの（16-4）、（c）底径が小さく、底部の切り離しが糸切りのもの（16-5～7）に分類される。（a）・（b）と（c）は層位的に分離できない。カマドから出土した土師器壺や内面に黒色処理が施されている土師器壺からみて、本住居跡の時期は、須恵器壺（c）にあたる平安時代9世紀後半頃と推定される。

S T 2 住居跡は、S T 1 住居跡の北方3mで検出された隅丸方形の住居跡である。南半のみの検出であるが、大きさは東西4.35m、南北1.58mを測り、カマドは認められない。住居跡は旧河道の覆土を掘り込んで作られており、床面から壁上面までの深さは20～30cmある。壁の立ち上がりはなだらかで、貼床等は認められない。覆土は大きく3層に分かれると、覆土中から遺物は出土しなかった。本住居跡の時期は不明であるが、旧河道の覆土上面に古墳時代の土器が含まれていることから、おそらく奈良・平安時代に属するものと思われる。

奈良・平安時代の住居跡は、この他トレンチ調査部分の壁面観察から、古墳時代の遺物包含層を切った状態で最低6棟確認されている（S T66～70・75）。明らかな遺物の共伴はなく、詳細な時期は不明である。

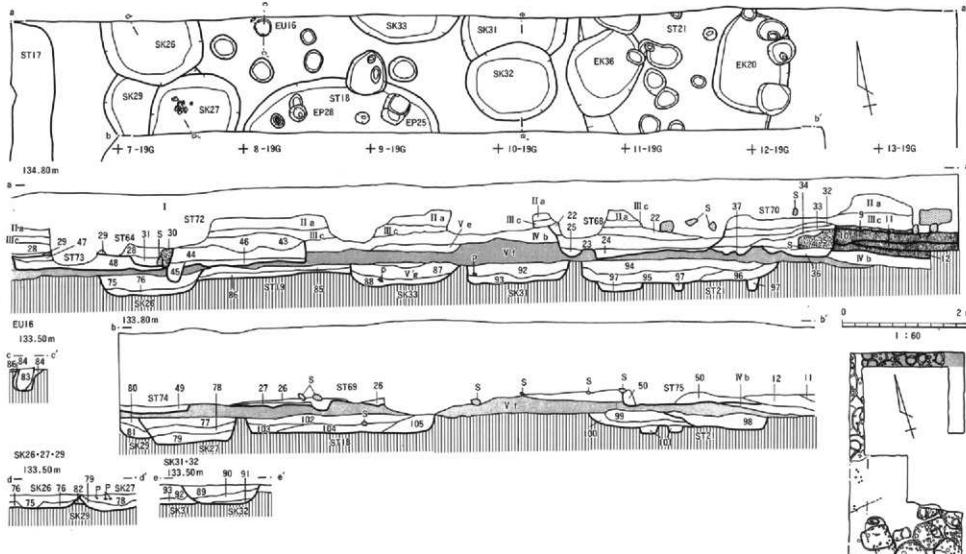
土坑は、確実なものでSK3・4・7～9の5基が検出されている。いずれもS T 1 住居跡の周辺で確認されたものである。SK3土坑は、平面形が不整楕円形を呈し、大きさは東西86cm、南北131cmを測る。覆土は黒褐色細砂の單一層で、遺物は出土しなかった。SK4土坑は、平面形が不整の長方形を呈し、大きさは東西208cm、南北138cmを測る。覆土は二層に分かれ、遺物は出土しなかった。SK7土坑は、平面形が不整の方形を呈し、大



土壌性別	品種代名	特徴
ST3	13) HY' R2/1黒色砂質ソレント (虎次郎・黄褐色子房人、耐性ありやわらかい)	
ST4	14) HY' R2/1黒色砂質ソレント (虎次郎多葉垂花、粘軟ありやわらか)	
ST5	15) Y'S K 7/3黒色砂質ソレント (黒色子房トワラカサギ人、粘軟)	
ST6	16) HY' R2/2黒色砂質ソレント (虎次郎・小葉紫葉人、性臭あり)	
ST7	17) HY' R2/2黒色砂質ソレント (1年に耐性、1年に比べ化粧多く入る)	
ST8	18) Y'S K 7/3黒色砂質ソレント (黒葉子房・黄褐色子房トワラカサギ人)	
ST9	19) Y'S K 7/3黒色砂質ソレント (虎次郎・化粧少人、粘軟あり)	
ST10	20) HY' R2/1黒色砂質ソレント (虎次郎・紫葉人、粘軟あり)	
ST11	21) Y'S K 7/4 黒色砂質ソレント (黒色子房トワラカサギ人)	黒葉
ST12	22) HY' R2/1黒色砂質ソレント (虎次郎化粧温室、粘軟あり)	
ST13	23) HY' R2/2黒色砂質ソレント (虎次郎化粧温室、粘軟あり)	
ST14	24) HY' R2/3黒色砂質ソレント (虎次郎・黒葉トワラカサギ人、粘軟)	
ST15	25) Y'S K 6/6 黒色砂質ソレント (虎次郎・ブックアソム人) カドリ	
ST16	26) Y'S K 5/6 黑色砂質ソレント (カマツ)	
ST17	27) HY' R2/1黒色砂質ソレント (虎次郎多葉垂花、粘軟あり)	
ST18	28) HY' R2/2黒色砂質ソレント (虎次郎・性臭人、粘軟)	
ST19	29) HY' R2/3黒色砂質ソレント (虎次郎・性臭人、粘軟)	
ST20	30) Y'S K 7/3 黑色砂質ソレント (虎次郎・性臭人、粘軟)	
ST21	31) Y'S K 7/3 黑色砂質ソレント (虎次郎・性臭人、無色トワラカサギ人、粘軟)	黒葉
ST22	32) Y'S K 7/3 黑色砂質ソレント (虎次郎・性臭人、無色トワラカサギ人、粘軟)	黒葉

32 10Y R3/2黒画面砂留シート（1層に糊付、1層に比べ各部少なく混入）
33 10Y R3/2黒画面砂留シート（底紙・糊付・砂留シート共、粘着力あり）
34 10Y R3/2黒画面砂留シート（底紙・糊付・砂留シート共、やわらかい）
35 10Y R3/4黒画面砂留シート（底紙化・糊付化・砂留シート共、やわらかい）
ST13
36 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・黄緑色地多量混入、粘着力あり）
37 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・糊付・砂留シート共、粘着力あり）
38 10Y R3/2黒画面砂留シート（2層に糊付、1層が墨混入）
ST14
39 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・黄緑色地多量混入、粘着力あり）
40 7.5Y R3/2黒画面砂留シート（底紙化・糊付化・砂留シート共、粘着力あり）
41 6.5Y R3/2黒画面砂留シート（底紙化・糊付化・砂留シート共、粘着力あり）
42 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化多量混入、粘着力あり）
ST15
43 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化多量混入、粘着力あり）
44 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化多量混入、粘着力あり）
45 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化多量混入、粘着力あり）
46 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化多量混入、粘着力あり）
47 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化多量混入、粘着力あり）
48 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化多量混入、粘着力あり）
49 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化多量混入、粘着力あり）
50 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化多量混入、粘着力あり）
ST16
51 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・土糞片多量混入、粘着力あり）
52 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・砂留シート共、粘着力あり）
53 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・砂留シート共、やわらかく）
54 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・砂留シート共、やわらかく）
ST17
55 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・土糞片多量混入、粘着力あり）
56 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・砂留シート共、粘着力あり）
57 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・砂留シート共、やわらかく）
58 10Y R3/2黒画面砂留シート（糊付化・底紙化・砂留シート共、やわらかく）
ST18

第6図 C区平面図



土壌性別

- 平野地帯
ST58
22 10Y R2/1黒褐色砂質シルト (洪化泥、粘性ありやわらかい)
33 10Y R2/2黒褐色砂質シルト (洪化泥、黄褐色粘土質多量混入)
34 10Y R2/3黒褐色シルト (黒色粘土・黃褐色粘土質多量混入)
25 10Y R2/4黒褐色シルト (黒色粘土・黄褐色粘土・ゴブテク多量混入、底く縫み細ら
れ性あり) 粘土
ST69
26 10Y R2/1黒褐色砂質シルト (洪化泥、黄褐色粘土・鉄分多量混入、かたい)
27 10Y R2/2黒褐色砂質シルト (洪化泥・黒色粘土・鉄分混入、かたい) 粘土
ST70
32 10Y R2/1黒褐色砂質シルト (洪化泥・黄褐色粘土・鉄分混入、粘性あり)
33 10Y R2/2黒褐色砂質シルト (洪化泥・3-4mm 黄褐色粘土質混入、粘性あり)
34 10Y R2/3黒褐色砂質シルト (洪化泥・洪化泥・灰土質・5mm 黄褐色粘土質多量混入、
粘性あり) ゴブテク混入
35 10Y R2/4黒褐色砂質シルト (黄褐色粘土・灰土質・ゴブテク・ブロック、鐵分の鉄化物混入
かたづ)
36 7.5Y R2/1黒褐色砂質シルト (黄褐色・黄褐色粘土・鉄土・ゴブテク多量混入、粘性あり)
37 7.5Y R2/2黒褐色砂質シルト (黄褐色・黄褐色粘土ブロック、灰土質・ゴブテク混入、
粘性あり) ゴブテク混入
38 7.5Y R2/3黒褐色砂質シルト (黄褐色・黄褐色粘土ブロック、粘性あり) 粘土
ST72 (地表直上?)
43 7.5Y R2/2黒褐色砂質シルト (洪化泥・黄褐色粘土・鉄土・ゴブテク多量混入、粘性あり)
44 10Y R2/2黒褐色砂質シルト (洪化泥・灰土・純土・ゴブテク・鉄分入り) 粘性あり
45 10Y R2/1黒褐色砂質シルト (洪化泥・灰土・鉄分入り)
46 7.5Y R2/1黒褐色砂質シルト (黄褐色粘土・鉄土・ゴブテク・黄褐色混入、粘性あり)
ST73
47 7.5Y R2/2黒褐色砂質シルト (洪化泥・灰土・ゴブテク・黄褐色混入、粘性あり)
48 10Y R2/1黒褐色砂質シルト (洪化泥・灰土・鉄分入り)
ST74
49 10Y R2/1黒褐色砂質シルト (黄褐色粘土・ゴブテク・洪化泥入り)
50 10Y R2/2黒褐色砂質シルト (黄褐色粘土・洪化泥混入、粘性あり)
51 10Y R2/3黒褐色砂質シルト (洪化泥・黄褐色粘土・洪化泥多量混入)
編文時代
SK26
75 10Y R2/2黒褐色砂質シルト (洪化泥・黒褐色粘土混入、粘性あり)
76 10Y R2/3黒褐色砂質シルト (洪化泥多量混入、粘性あり)

SK27 77 2.5Y 3/1黒褐色砂質シルト (洪化泥・白褐色風化粘土多量混入、粘性あり堅く締まる)

78 10Y R2/2黒褐色砂質シルト (洪化泥・白褐色風化粘土、間に比べてやわらかい)

79 7.5Y R2/3黒褐色砂質シルト (2層より多く1層より少なく洪化粘土混入、粘性ありやわ
らか)

SK31

80 7.5Y R3/2黒褐色砂質シルト (白色化多量混入、粘性あり堅く締まる)

81 5 Y R3/2黒褐色砂質シルト (洪化泥多量混入、粘性あり)

EU16 82 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (やわらか)

83 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (粘化物多量混入、粘性あり)

ST76

84 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (粘化物多量混入、粘性あり)

85 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (洪化泥多量混入、やわらか)

86 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (洪化泥多量混入、粘性あり)

87 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (洪化泥多量混入、粘性あり)

88 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (洪化泥多量混入、やわらか)

89 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (洪化泥多量混入、粘性あり)

90 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (洪化泥多量混入、粘性あり)

91 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

ST71 92 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

93 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

94 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

95 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

96 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

97 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

98 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

99 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

100 10Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

101 7.5Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

102 7.5Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

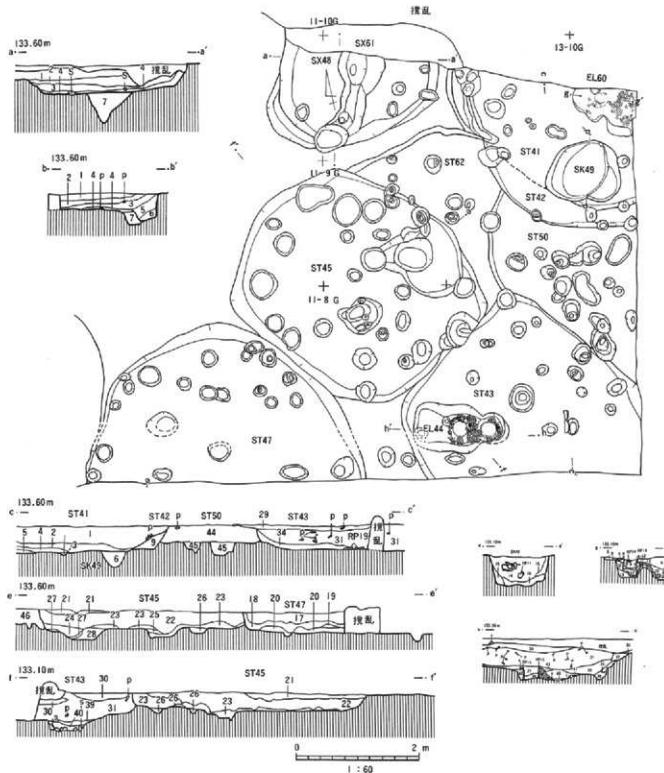
103 7.5Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

104 7.5Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

105 7.5Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

106 7.5Y R3/2黒褐色砂質シルト (1層に堅く、1層に比べて洪化泥多量混入)

第7図 D区平面図



土層性記

SKSK
1: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート
2: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート (底面加工遮蔽)
3: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート (上層に刷毛刷、底層より化粧化多く隠す)
4: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート (底面加工遮蔽)
5: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート (底面加工遮蔽)
6: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート (底面加工遮蔽)
SKSK
7: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート (底面加工遮蔽)
STU
1: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (土壁面)、耐候性刷毛、底層遮蔽
2: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛、底層遮蔽
3: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛、底層遮蔽
4: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛、底層遮蔽
5: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛、底層遮蔽
STU-EU
6: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛で表面に刷毛し、しまっている
7: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛で表面に刷毛し、底層遮蔽
8: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛で表面に刷毛し、底層遮蔽
9: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛で表面に刷毛し、底層遮蔽
10: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛で表面に刷毛し、底層遮蔽
11: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)
12: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (1回耐候性刷毛)
13: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (1回耐候性刷毛)
SKSK
14: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (土壁、屋根の専用色白土色シャンブレート)、底層遮蔽し、しまっている
15: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (6回耐候性刷毛)
16: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (6回耐候性刷毛)、底層遮蔽し、しまっている
STU
17: 10BY 2/3の薄地白土色シャンブレート (耐候性刷毛)、耐候性刷毛で表面に刷毛し、底層遮蔽
18: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート (底面加工遮蔽) 1回耐候性刷毛、刷毛を留める
19: 7.5YR 2/2の薄地白土色シャンブレート (1回耐候性刷毛)

31: 10Y R3/2薄地耐候シート(10mm厚)

32: 10Y R2/2薄地耐候シート(10mm厚) (黒色系・黄系・青系)

33: 10Y R2/2薄地耐候シート(10mm厚) (黒色系・黄系・青系) (耐候性約5%減入し、しまっている)

34: 10Y R3/2薄地耐候シート(12mm厚) (黒色系・黄系・青系)

35: 10Y R3/2薄地耐候シート(12mm厚) (黒色系・黄系・青系) (耐候性約5%減入し、しまっている)

36: 10Y R3/2薄地耐候シート(15mm厚) (黒色系・黄系・青系)

37: 10Y R4/2薄地耐候シート (22mm厚) (黒色系・黄系・青系)

38: 10Y R3/2薄地耐候シート (22mm厚) (黒色系・黄系・青系)

39: 10Y R3/2薄地耐候シート (25mm厚) (黒色系・黄系・青系)

40: 10Y R3/2薄地耐候シート (28mm厚) (黒色系・黄系・青系)

41: 10Y R3/2薄地耐候シート (30mm厚) (黒色系・黄系・青系)

42: 10Y R3/2薄地耐候シート (32mm厚) (黒色系・黄系・青系)

43: 10Y R3/2薄地耐候シート (35mm厚) (黒色系・黄系・青系)

44: 10Y R3/2薄地耐候シート (38mm厚) (黒色系・黄系・青系)

45: 10Y R3/2薄地耐候シート (40mm厚) (黒色系・黄系・青系)

46: 10Y R3/2薄地耐候シート (42mm厚) (黒色系・黄系・青系)

47: 10Y R3/2薄地耐候シート (45mm厚) (黒色系・黄系・青系)

48: 10Y R3/2薄地耐候シート (48mm厚) (黒色系・黄系・青系)

49: 10Y R3/2薄地耐候シート (50mm厚) (黒色系・黄系・青系)

50: 10Y R3/2薄地耐候シート (52mm厚) (黒色系・黄系・青系)

51: 10Y R3/2薄地耐候シート (55mm厚) (黒色系・黄系・青系)

52: 10Y R3/2薄地耐候シート (58mm厚) (黒色系・黄系・青系)

53: 10Y R3/2薄地耐候シート (60mm厚) (黒色系・黄系・青系)

54: 10Y R3/2薄地耐候シート (62mm厚) (黒色系・黄系・青系)

55: 10Y R3/2薄地耐候シート (65mm厚) (黒色系・黄系・青系)

56: 10Y R3/2薄地耐候シート (68mm厚) (黒色系・黄系・青系)

57: 10Y R3/2薄地耐候シート (70mm厚) (黒色系・黄系・青系)

58: 10Y R3/2薄地耐候シート (75mm厚) (黒色系・黄系・青系)

59: 10Y R3/2薄地耐候シート (80mm厚) (黒色系・黄系・青系)

60: 10Y R3/2薄地耐候シート (85mm厚) (黒色系・黄系・青系)

61: 10Y R3/2薄地耐候シート (90mm厚) (黒色系・黄系・青系)

62: 10Y R3/2薄地耐候シート (95mm厚) (黒色系・黄系・青系)

63: 10Y R3/2薄地耐候シート (100mm厚) (黒色系・黄系・青系)

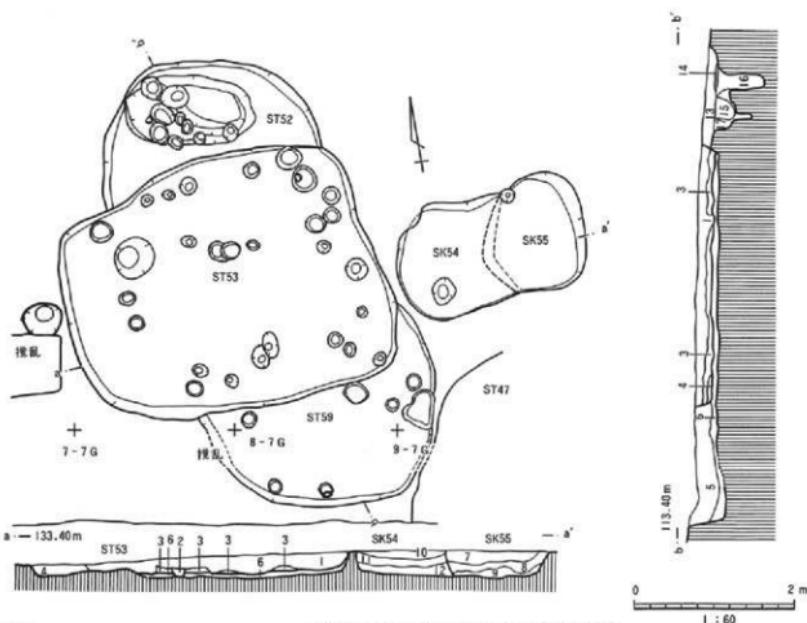
ST9:

64: 10Y R3/3薄地耐候シート (10mm厚) (黒色系・黄系・青系)

65: 10Y R3/3薄地耐候シート (14mm厚) (黒色系・黄系・青系)

ST10:

66: 10Y R3/4薄地耐候シート (10mm厚) (黒色系・黄系・青系)



第9図 S T 52・53・59, S K 54・55平面図

土層注記
ST52
 1 : 10Y R 2/2 黒褐色シルト (黒色・黄褐色シルト粒 1%混入)
 2 : 10Y R 3/2 黑褐色砂質シルト (8層混入)
 3 : 10Y R 3/2 黑褐色砂質シルト (1層まだらに混入)
 4 : 10Y R 3/2 黑褐色砂質シルト (黒褐色シルト粒 1%, 6層まだらに混入)
ST53
 5 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (1層に細粒、1層に比べ各5%と多く混入)
 6 : 10Y R 3/2 黑褐色砂質シルト
SK55
 7 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (黒色シルト粒 5%混入)

8 : 10Y R 2/2 黑褐色シルト (7層に比べサラサラし、薄色粒少なく混入)
 9 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (8層混入)
SK54
 10 : 10Y R 3/2 黑褐色砂質シルト (黒色・黄褐色シルト粒 1%混入)
 11 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (黒褐色シルト粒 1%混入)
 12 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (11層混入)
ST59
 13 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (1層に細粒、1層に比べ各5%と多く混入)
 14 : 10Y R 4/4 黑褐色砂質シルト (10層混入)
 15 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (黒褐色シルト粒 1%混入)
 16 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (8層混入)
 17 : 10Y R 2/2 黑褐色砂質シルト (9層混入)

きさは東西52cm、南北52cmを測る。覆土は二層に分かれるが、遺物は出土しなかった。S

K 8 土坑は、平面形が不整の長方形を呈し、大きさは東西51cm、南北91cmを測る。覆土は黒褐色シルトの單一層で、遺物は出土しなかった。

土坑の時期は、旧河道の覆土を掘り込んで作られていることから奈良・平安時代以降に属するものと思われるが、遺物の出土がなく、詳細は不明である。

表1 縄文時代土坑観察表

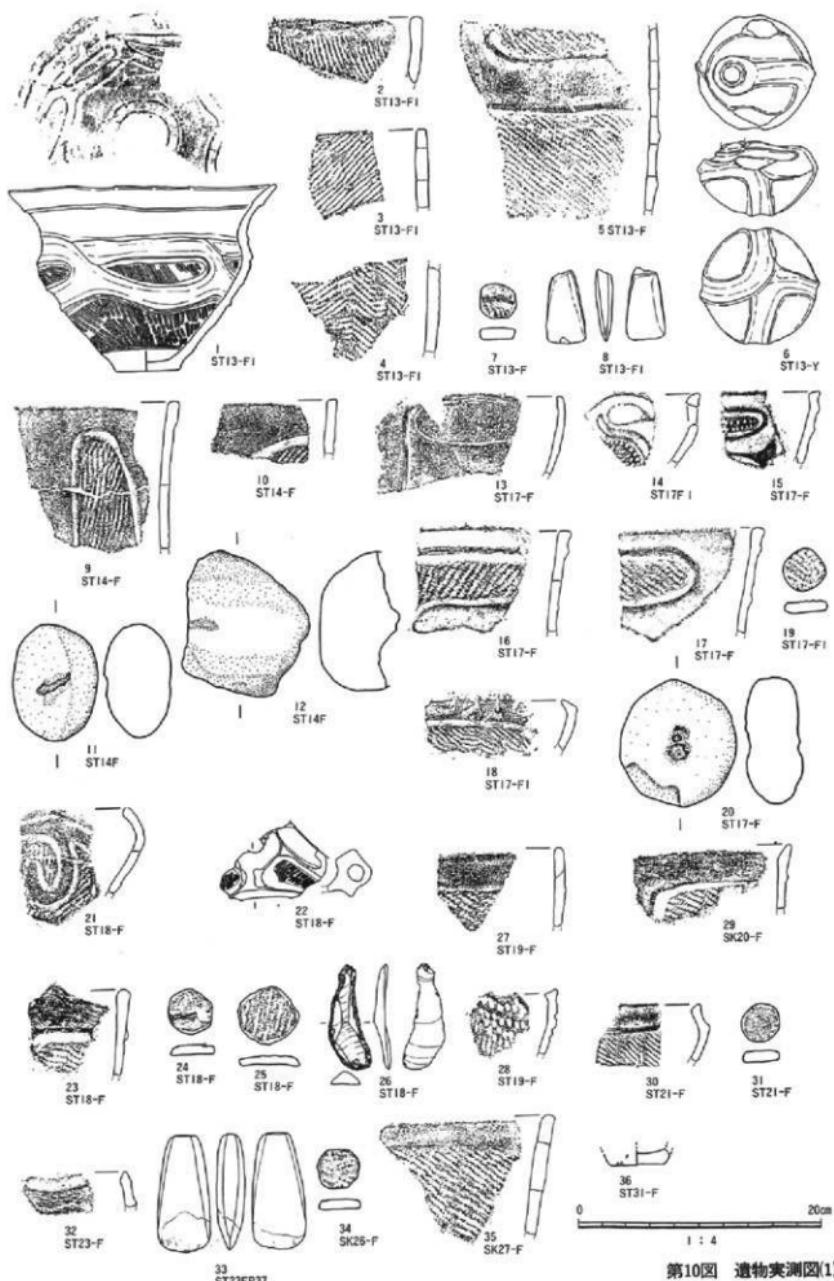
遺構番号	鉢器番号	位 置	平 面 形	規 模 cm	深 さ cm	重 叠 関 係
SK24	6	8・9・15・17G	円形?	径120	16	SK24→ST13→ST23
SK26	7	6・7-20G	横円形	158×100以上	43	SK29→SK26→SK27
SK27	7	7-20G	横円形	142×94以上	26	同上
SK29	7	6・7-20G	横円形	157×100以上	34	SK31→32
SK31	7	9・10-20G	横円形	174×48以上	34	SK31
SK32	7	9・10-30G	横円形	143×126	31	同上
SK33	7	8・9-20G	横円形	164×60以上	34	
SK49	8	12・13・9・10G	不整形	120×90	48	SK49→ST41
SK54	9	9-8・9G	横円形	142×120以上	28	SK55→SK54
SK55	9	9-10-8・9G	横円形	144×126	30	同上
SK57	6	8-14-15G	横円形	130×150以上	37	SK57→ST14?
SK58	6	8-9-13-14G	不 明	135以上×180以上	35以上	SK58→ST14?

表2 繩文時代住居跡観察表

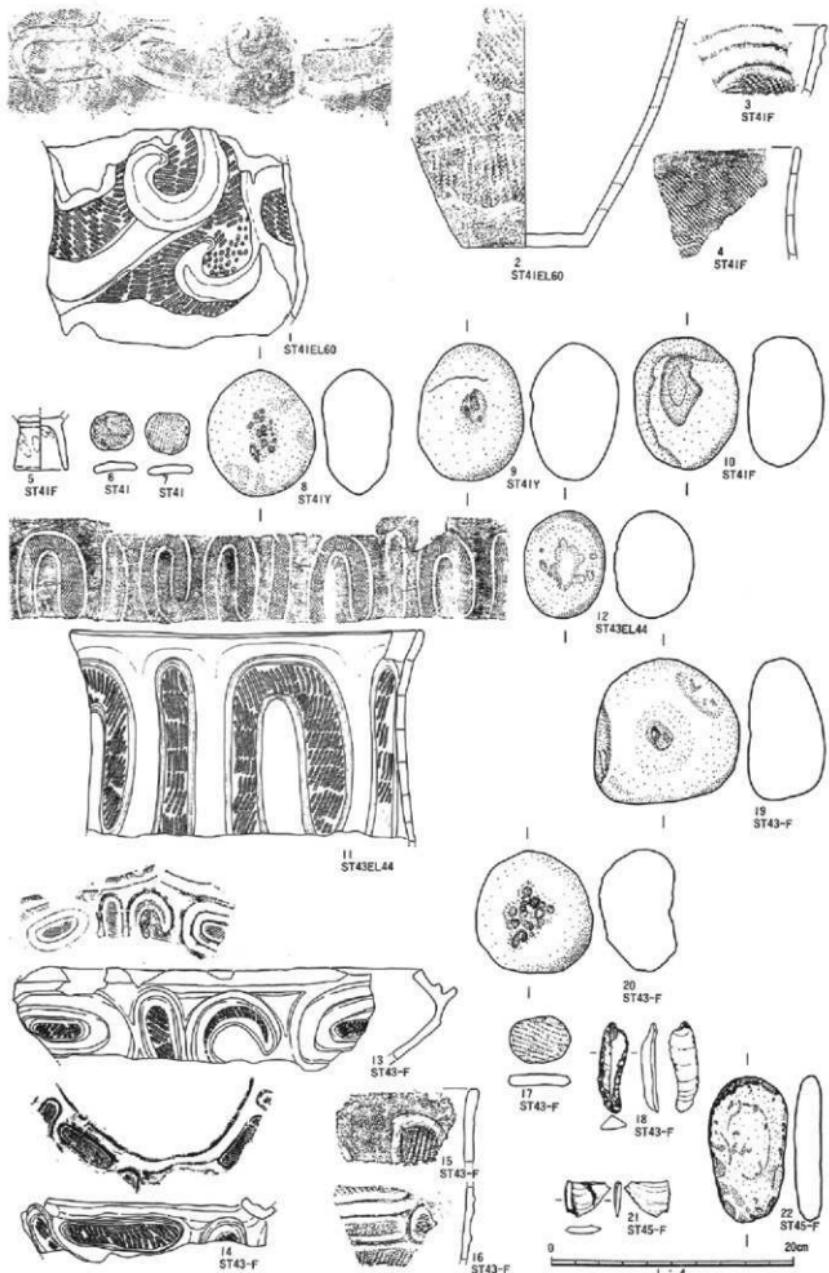
遺構番号	ST13	ST14	ST15	ST16	ST17	ST18	ST19
鉢形番号	6	6	6	6	6	7	7
回版番号	14					15	
位置	8~15~17G	8~14~15G	8~17~19G	8~17~19G	8~19~20G	8~9~20G	8~9~20G
形状・規模	楕丸方形、1/2検出	不明、1/3検出	不明、1/3検出	不明、1/3検出	不明、1/3検出	椭丸方形、1/4検出	不明、断面で壁面確認
壁	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	不明
床	平組でやや硬い	平組でやや硬い	平組でやや硬い	平組でやや硬い	平組でやや硬い	平組でやや硬い	平組でやや硬い
炉・周溝	炉不明、周溝無し	炉不明、周溝無し	炉不明、周溝無し	炉不明、周溝無し	炉不明、周溝無し	炉不明、周溝無し	不明
柱穴	5基検出	3基検出	3基検出	2基検出	4基検出	6基検出	4基検出
遺物	10~1~8	10~9~12			10~13~20	10~21~25	10~26~28
時期	大木10式段丘段階						
重複関係	SK24~ST13→ ST23 ST63~ST13	SK57~ST14→ ST23 SK58~ST14	ST15~ST16	ST15~ST16→ ST17			ST19~SK26 ST19~SK33
備考							

遺構番号	ST21	ST23	ST41	ST42	ST43	ST45	ST47
鉢形番号	7	6	8	8	8	8	8
回版番号	15		12	12	13	13	13
位置	10~12~20G	8~15~16G	12~13~9~10G	12~13~9~10G	11~13~7~8G	10~12~8~9G	9~11~7~8G
形状・規模	円形?、1/2検出	円形?、1/2検出	円形?、1/4検出	円形?、1/4検出	椭丸方形、東西3.30m南北3.50m以上	椭丸方形、東西3.30m南北3.15m	円形?、1/2検出、径4.4m
壁	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む
床	平組でやや硬い	平組でやや硬い	平組でやや硬い	不明	平組でやや硬い	平組でやや硬い	平組でやや硬い
炉	不明	不明	石棺徒式炉 EL60 主軸方位 N~NW~S 土器・鐵器・陶器 (1~2) 1個体正位 埋設、繩目取り痕 検出	石棺徒式炉 EL60 主軸方位 N~NW~S 土器・鐵器・陶器 (1~2) 下半部1個体 埋設正位埋設、部分 的に石棺徒式炉 石棺蓋、円形石組、 立石不明 前庭器 2次調査 ST92で検出、馬蹄形 に広がる 北西一部検出、幅 15~20cm 深さ 10~15cm	石棺徒式炉 EL44 主軸方位 N~NW~S 土器・鐵器・陶器 (1~2) 下半部1個体 埋設正位埋設、部分 的に石棺徒式炉 石棺蓋、円形石組、 立石不明あり 前庭器 方形に広が る。柱穴2基検出	石棺徒式炉 EL44 主軸方位 N~NW~S 土器・鐵器・陶器 (1~2) 下半部1個体 埋設正位埋設、部分 的に石棺徒式炉 石棺蓋、円形石組、 立石不明あり 前庭器 方形に広が る。柱穴2基検出	不明
周溝	15基検出	無し	無し	無し	無し	無し	無し
柱穴	16~30~31	4基検出	7基検出	不明	16基検出	26基検出	22基検出
遺物		16~32~33	11~1~10		11~11~21	11~22~23	
時期					古		
重複関係		SK24~ST13→ ST23 ST14~ST23	ST62~ST56→ ST42~ST41 SK49~ST41	ST62~ST50→ ST42~ST41 SK49~ST41	ST62~ST50→ ST45~ST45→ ST47	ST61~ST50→ ST43~ST45→ ST47	左記に同じ
備考	EK20~36を伴う。複式炉の繩目取り痕?		2次調査ST92の南西 部分と考えられる。				

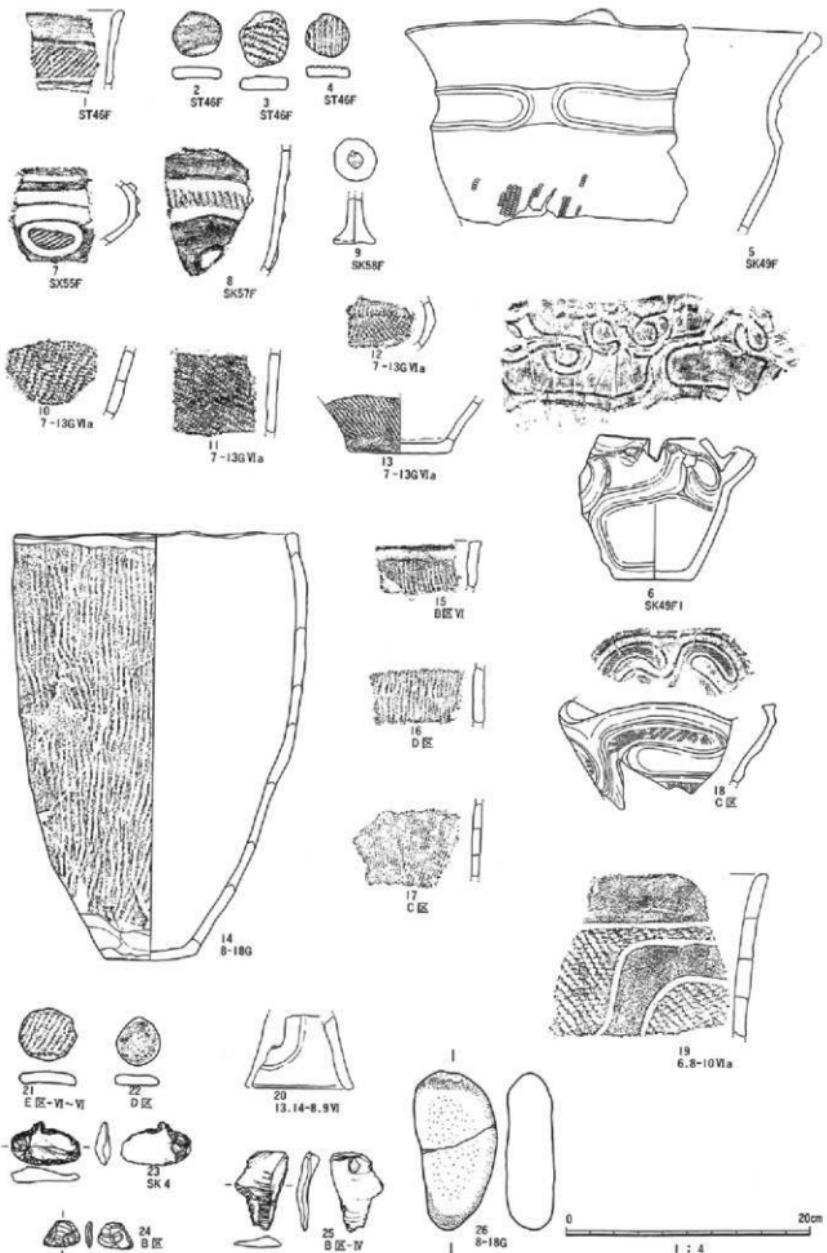
遺構番号	ST50	ST52	ST53	ST59	ST62
鉢形番号	8	9	9	9	8
回版番号	12		14	14	
位置	12~13~8~9G	7~8~9G	7~8~9G	7~9~7~8G	11~13~8~9G
形状・規模	不明、1/2検出	円形、1/2検出、往2、 84mm	椭丸方形、東西3.88m南北3.16m	円形、1/2検出、往2、 84mm	不明
壁	緩やかに掘込む	緩やかに掘込む	やや垂直に掘込む	やや垂直に掘込む	
床	平組でやわらかい	平組でやわらかい	平組でやわらかい	平組でやわらかい	
炉	不明、北側土坑は繩 目取り痕の可能性 あり	不明	不明	不明	不明
周溝	無し	無し	無し	無し	無し
柱穴	不明	28基検出	8基検出	6基検出	
遺物					
時期					
重複関係	左記に同じ	ST52~ST53	ST52~ST53 ST59~ST53	ST59~ST53	ST62~ST50+ ST42~ST41 ST62~ST50+ ST43~ST45+ ST47
備考					



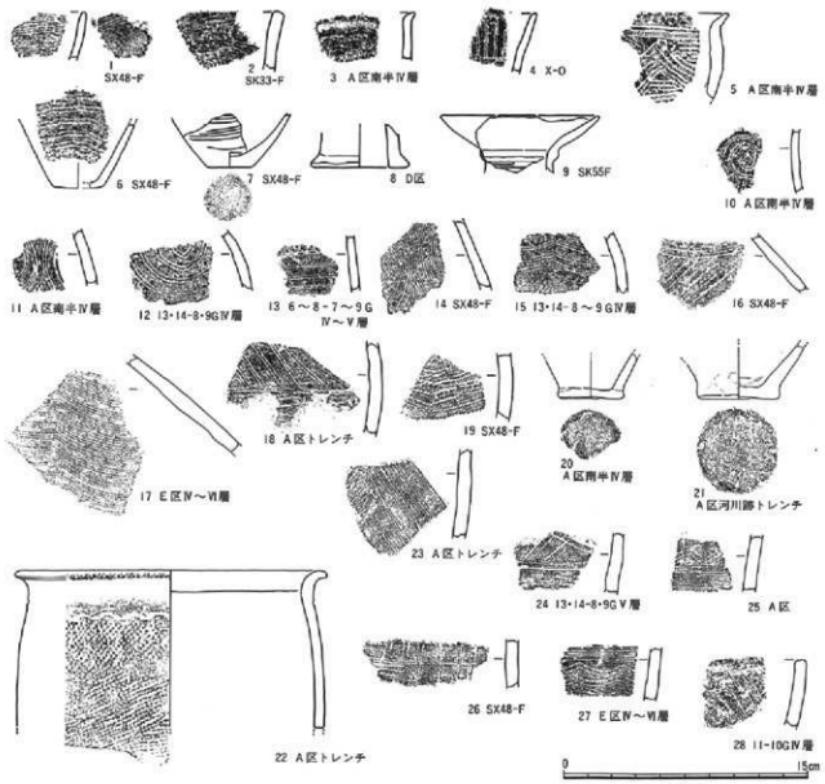
第10図 遺物実測図(1)



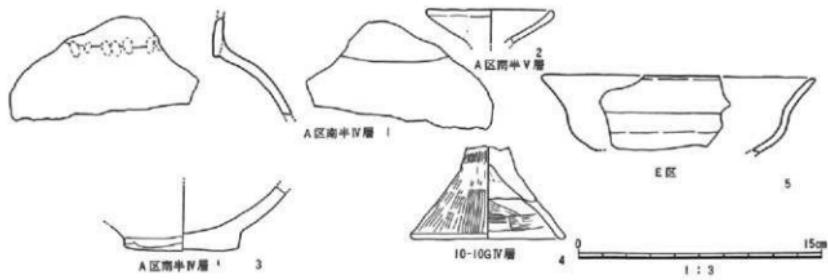
第11図 遺物実測図(2)



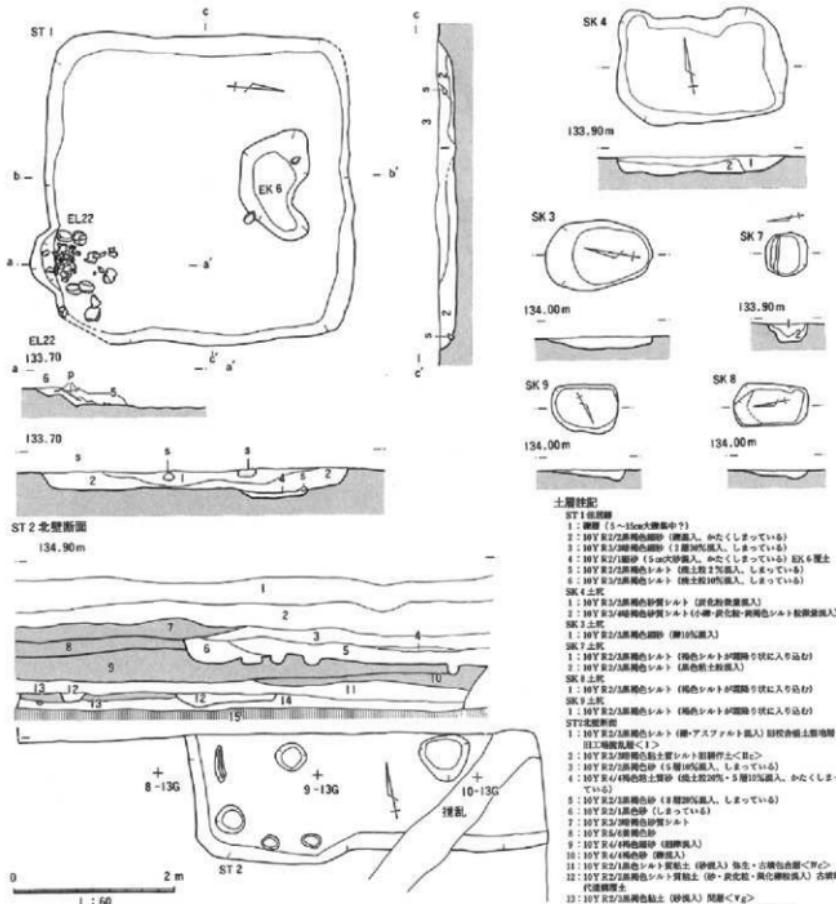
第12図 遺物実測図(3)



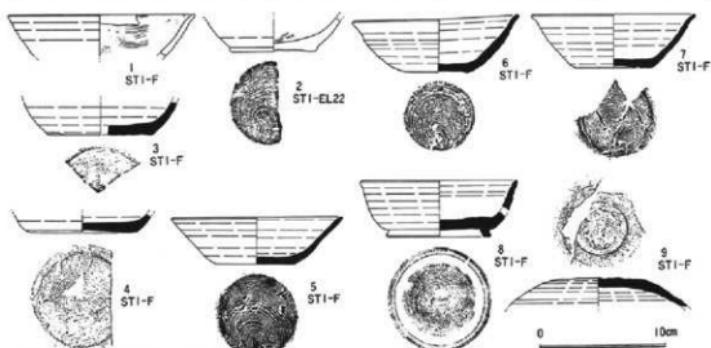
第13図 遺物実測図(4)



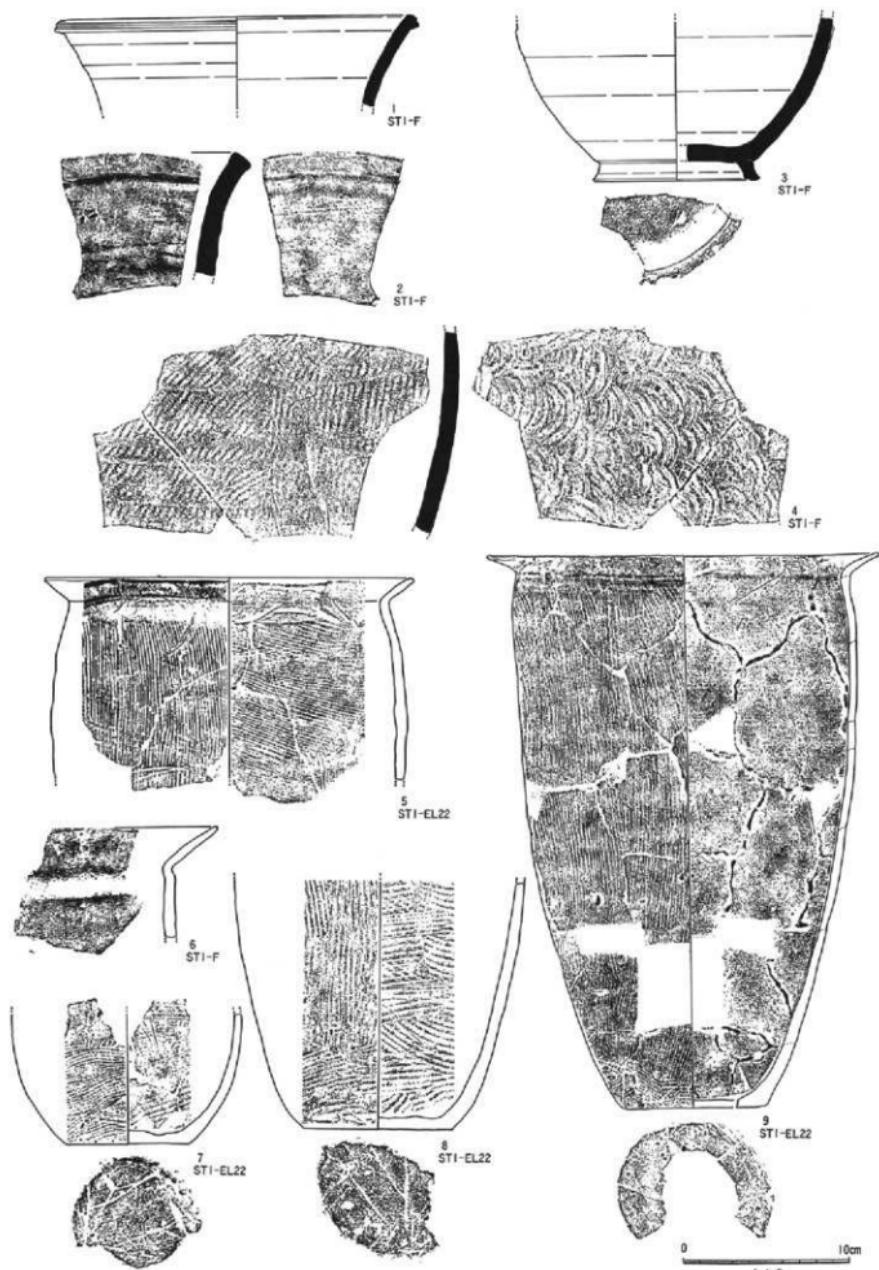
第14図 遺物実測図(5)



第15図 ST 1・2、SK 3・4・7～9平面図



第16図 遺物実測図 (6)



第17図 遺物実測図(7)

表3 遺物觀察表

器物 番号	器物 番号	出土位置	被 刷	器 種	分類	出土背景	外 面	内 面	法 量 mm	備 考	
10 1 17	ST13-F1	圓文土器	深鉢	B2		縄文又は6位、圓文・圓文斜位方 角施文、施文底と在鉢区隔の消 文、施文帶向脚部施起、施文 底と在鉢区隔の消文、2/3下半 黑色化・及上部平行	研磨調査、2/3下半黑色化 変化・炭化物付着	口径(219) 底径 S2.3 厚高140.2	RP5 ヒレ状で古い		
10 2 18	ST13-F1	圓文土器	深鉢	D		円筒形底系文	研磨調査				
10 3 18	ST13-F1	圓文土器	深鉢	D		RL施文	研磨調査			粗製	
10 4 18	ST13-F1	圓文土器	深鉢	D		明文又はLR+RL? 施文	研磨調査				
10 5 17	ST13-F1	圓文土器	深鉢	A2	石英粒多 風	縄文又は「前脚部施起」、地文 RL施文	研磨調査		RP4		
10 6 16	ST13-Y	圓文土器	口付土器			ヒレ状に複数の主体、縄帶の両側 ヒレ部に一部剥り出る、1対の ヒレ部に剥離部あり		最大径98	往口部欠損		
10 7 20	ST13-F	土製品				縦線、LR施文		長軸28 幅軸27 厚9 重量3.52			
10 9 16	ST14-F	圓文土器	深鉢	A1		比縫区画、LR施文充満	研磨調査				
10 10 16	ST14-F	圓文土器	深鉢	A1		ヒ・衣縫、LR施文充満	研磨調査				
10 13 16	ST17-F	圓文土器	鉢	C2	西脚骨付	縫跡を伴う複数区画、爪痕状 底及上部充満、事な網状	研磨調査、炭化物付着 (?)		沈没口縫部か らなる		
10 14 18	ST17-F1	圓文土器	鉢	C1b		施文消滅部が施文、爪痕状点 文、機織する玉文化	後期的跡相				
10 15 18	ST17-F	圓文土器	深鉢	A1		縫跡区画、糸目縫点文充満	研磨調査		口唇部外傾		
10 16 17	ST17-F	圓文土器	深鉢	A2		縫跡区画、縫跡の手状の剥り出 し、LR施文、前脚部未施起	研磨調査		口唇部平坦で 丸みを持つ		
10 17 17	ST17-F	圓文土器	深鉢	A2		アルファベット文、種類区画、 RL施文の充満	研磨調査				
10 18 18	ST17-F	圓文土器	浅鉢	B		化粧区画、LL施文(反屈)、底化 物付着	研磨調査、炭化物付着				
10 19 20	ST17-F1	土製品				RL施文		長軸35 短軸32 厚9 重12.25			
10 21 16	ST18-F	圓文土器	浅鉢	A		アルファベット文、口唇部直下 比縫区画、圓文施文の充満				波状縫	
10 22 16	ST18-F	圓文土器	口付土器			縫跡区画、巣状の手状の剥り出 し					
10 23 16	ST18-F	圓文土器	深鉢	D1b		縫跡一部比縫状、圓文施文充 満	研磨調査、口唇部およ び内面の一部に炭化物 付着			波状縫	
10 24 20	ST18-F	土製品				縫跡、圓文施文		長軸36 短軸32 厚8 重10.54			
10 25 20	ST18-F	土製品				RL施文		長軸48 短軸45 厚8 重18.09			
10 27 17	ST19-F	圓文土器	深鉢	A1		比縫区画、RL施文充満					
10 28 18	ST19-F	圓文土器	鉢	C1a		網文文(撚糸工具)、圓文施文	研磨調査			突起口縫	
10 29 16	SK20-F	圓文土器	深鉢	A		比縫文(伴う接縫)、一部ヒレ状、 圓文施文					
10 30 18	ST21-F	圓文土器	鉢	C1a		被縫区画、LK施文	研磨調査、炭化物付着				
10 31 20	ST21-F	土製品				磨消費		長軸33 短軸28 厚9 重10.42			
10 32 18	ST22-F	圓文土器	深鉢	C1a		被縫区画、爪痕状点文	研磨調査				
10 34 20	SK26-F	土製品				比縫、圓文施文		長軸34 短軸33 厚8 重10.81			
10 35 18	SK27-F	圓文土器	深鉢	A		LR施文	研磨調査			粗製	
10 36 18	ST34-F	圓文土器	小型深鉢			RL施文					
11 1 17	ST41-EL60	圓文土器	深鉢	A3		横走る波紋文、ヒレ状突起に 前脚部作付、爪痕部内側側面 隆起部とび比較的深く、内側側面 に施文、口唇部充満、底部充 満、2/3下半黑色化(破裂)	研磨調査、一部黑色の 内れ、底熱	底径185	RP14 縫方向に文様 配置、底盤に 網狀		
11 2 18	ST41-EL60	圓文土器	深鉢			地文(縫跡)、縫跡部研磨調査、 網狀					
11 3 16	ST41-F	圓文土器	深鉢	A		縫跡区画、LR施文	研磨調査			波状縫	
11 4 18	ST41-F	圓文土器	深鉢	A		LR施文、口唇部研磨	研磨調査				
11 5 18	ST41-F	圓文土器	小手台付鉢			磨痕		底径28			
11 6 20	ST41-F	土製品				圓錐		長軸35 短軸30 厚6 重8.53			
11 7 20	ST41-F	土製品				左唇R底系文		長軸36 短軸32 厚8 重9.47			
11 11 16	ST43-EL44	圓文土器	深鉢	A		地文縫跡区画、アルファベット文、 LR施文充満、前脚部丁寧な研 磨、2/3下半黑色化	2/3下半黑色化変化(破 裂)	口徑291	口唇部平坦 RP15		
11 13 16	ST43-F	圓文土器	浅鉢	B		縫跡区画、アルファベット文、 ヒ・レ状と並り出る、LR 施文充満、口唇部テナ別磨、炭 化物付着	研磨調査	口徑(333)	古~中		
11 14 16	ST43-F	圓文土器	口付土器			縫跡区画充満、一部ヒレ状に 剥離2出す、LR+BT单脚圓文施文充 満、口唇部テナ別磨、炭化物付 着	研磨調査、炭化物付着	口徑162	ヒレ状剥離の 随帯変遷 大木リの進化 したもの		
11 15 16	ST43-F	圓文土器	深鉢	A		縫跡区画、アルファベット文、 LR施文充満	研磨調査			口唇部平坦	
11 16 18	ST43-F	圓文土器	深鉢	A		縫跡区画、前脚部施起、磨消費丁字 な施文、底影点文充満、LR施 文充満					
11 17 20	ST43-F	土製品						長軸38.5 短軸 50 厚9 21.12			
12 1 17	ST46-F	圓文土器	深鉢	A		縫跡区画、LR施文の充満、赤色	研磨調査				
12 2 20	ST46-F	土製品				前脚部・被縫		長軸39 短軸36 厚9 重17.96			
12 3 20	ST46-F	土製品				LR施文		長軸32.5 短軸 49 厚9 24.96			
12 4 20	ST46-F	土製品				右唇R底系文		長軸36 短軸34 厚8 重12.64			

番号	通号	固版	出土位置	種 別	器 形	分類	胎土特徴	外 面	内 面	法 量 mm×g	備 考
12	5	17	SK49F	陶文土器	深鉢	E2b	口縁から腹部表面に陶文帯、瓶形に特徴的な輪郭線、施文、施文、口縁部小切欠	研磨調整	口径(342)	RP11	
12	6	16	SK49-F1	陶文土器	柱口土器				研磨調整	口径87 高さ115 底径64	RP11
12	7	16	SX55-F	陶文土器	浅鉢			輪郭区画横帯、RL(頭と足多角4木) 施文	研磨調整		
12	8~	16	SK57-F	陶文土器	深鉢			輪郭区画、施文施文帯		底径22	
12	9	18	SK58-F	土製品	円錐状土製品						RP12 施文
12	10	18	?-IG97a	陶文土器	深鉢		地文URL施文	研磨調整	口径(234)	RP12 施文	
12	11	18	?-IG97a	陶文土器	深鉢		地文陶文施文	研磨調整	口径(234)	RP12 施文	
12	12	18	?-IG97a	陶文土器	浅鉢		左巻R施文?	研磨調整	口径(234)	RP12	
12	13	18	?-IG97a	陶文土器	深鉢		地文URL施文、施文物付着	研磨調整、施文物付着	底径84	RP12	
12	14	18	8-18G	陶文土器	深鉢	C2	右巻R施文、口唇部直下部分の剥落あり、底辺部病害調査	研磨調整	口径(234) 高さ351 底径76	RP16 口唇部や外 縁	
12	15	18	B区VI	陶文土器	深鉢	D	地文左巻施文系文	研磨調整		施文	
12	16	18	D区	陶文土器	深鉢		地文右巻施文系文	研磨調整		施文	
12	17	CEK	陶文土器	深鉢			地文右巻施文系文	研磨調整		施文	
12	18	16	CEK	陶文土器	鉢		施文、輪郭(断面三角丁寧な 削跡) 区画、地文、元頃土質	研磨調整	口径(177)	底状線4単位、 口唇部や外 縁	
12	19	17	6-8-18G	陶文土器	深鉢	A	施文? 施文斜削直下丁寧な 削跡? 地文(施文5mm太 めの削跡)	ナデ		口唇部外側	
12	20	17	13-14- 8-9IV	陶文土器	右付鉢		4つ構内状? の恩、恩を回む音 消音あり	ナデ	底径(90)		
12	21	20	EIK IV-V	土製品	円盤状土製品		RL施文		長さ41 幅46 高 さ20.95		
12	22	20	DKE	土製品	円盤状土製品		施文帶		長さ39.5 幅36 高さ12.28		
13	1	20	SX48F	弥生土器	鉢		横走波状比較文(2条1幅 半 平行波状工具) 4段以上 平行縫隙1.0mm	横走波状文(2条1幅 半平行波状工具) 1段 平行縫隙3.0mm ナデ			
13	2	20	SK33F	弥生土器	壺		斜走波状比較文(2条1幅 半 平行波状工具) 4段以上 平行縫隙1.0mm	斜走波状文(2条1幅 半平行波状工具) 1段 平行縫隙1.0mm ナデ			
13	3	20	A区南半 IV層	弥生土器	鉢		横走波状比較文(2条1幅 半 平行波状工具) 2段以上 平行縫隙1.0mm				
13	4	20	X-O	弥生土器	鉢		口唇部直下およびびくびく部斜走 平行化粧文 1段その間に縫隙带 平行化粧文(2条1幅 半平行波状 工具) 平行縫隙1.0mm				
13	5	20	A区南半 IV層	弥生土器	鉢		びくびく部斜走平行化粧文1段、 体部直山形斜走平行化粧文 (3条1幅 半平行波状工具) 平行縫隙1.0~1.5mm			口唇部外反	
13	6	20	SX48F	弥生土器	鉢		斜走波状比較文(2条1幅 半 平行波状工具) 5段以上 平行縫隙1.0mm	底径(31.5)			
13	7	20	SX48F	弥生土器	鉢		底走下溝走波状比較文(2条1 幅 半平行波状工具) 4段以上 平行縫隙2.0mm	底径28.5	底底底底		
13	8	20	DKE	弥生土器	高杯				底径61.5		
13	9	20	SK55F	弥生土器	壺		横沈文(2条1幅半 竹管状 工具) 捻ね跡を有す 平行縫隙1.0mm 口唇部ミガキ		口径(97.5)		
13	10	20	A区南半 IV層	弥生土器	壺		曲巻文(2条1幅半 竹管状 工具) 平行縫隙1.0mm				
13	11	20	A区南半 IV層	浮生土器	壺		曲巻文(2条1幅半 竹管状 工具) 平行縫隙1.0mm				
13	12	20	13-14- 9GIV層	弥生土器	壺		曲巻文(2条1幅半 竹管状 工具) 平行縫隙1.0mm				
13	13	20	6-8-9- GIV-V	海生土器	壺		横沈文(2条1幅半 竹管状 工具) 4段以上 平行縫隙1.0mm				
13	14	20	SX48F	弥生土器	壺		曲巻文(2条1幅半 竹管状 工具) 平行縫隙1.0mm				
13	15	20	13-14- 8-9IV層	弥生土器	壺		下両溝走文(2条1幅半 竹管 状工具) 4段以上 平行縫隙1.0mm				
13	16	20	SX48F	海生土器	壺		横走平行化粧文 1段以上、その下位 に重三文(2条1幅半 竹管 状工具) 平行縫隙3.0mm				
13	17	20	EIKIV~ V層	弥生土器	壺		下両溝走文(2条1幅半 竹管 状工具) 4段以上 平行縫隙1.0mm				
13	18	20	A区トレ ンチ	弥生土器	壺		横走平行化粧文、その上位に重三角 文(2条1幅半 竹管状工具) 平行縫隙1.0mm				
13	19	20	SX48F	海生土器	壺		附加陶文				
13	20	20	A区南半 IV層	弥生土器	鉢		底部布目直瓶 ナデ		底径(40.5)	底部上げ底	
13	21	20	A区旧河 トレンチ IV層	弥生土器	壺		底部布目直瓶 捺部指痕度 ナデ		底径49.5	底部上げ底	

編番号	遺物番号	回収番号	出土位置	種別	器種	分類	出土特徴	外 画	内 画	法 量 mm×g	備 考
13	22	20	A区トレシナ	弥生土器	甕			口唇部彫文無文、腹面部下に階級統文LR支持位施文(头部2.5cm前後)、地縫深窪施文		口径(189)	口唇部外反
13	23	20	A区トレシナ	弥生土器	甕		良	第三角比施文(2条1幅半 竹管状工具)			
15	24	20	13-14-3-9G-V層	弥生土器	甕		良	横走平行比施文2段以上、その上位に底三角比施文(2条1幅半 竹管状工具)			口縫部(口唇部欠損)
13	25	20	A区	弥生土器	甕		穢臭	横走平行比施文または豊臣和文その間に底三角比施文(2条1幅半 竹管状工具)			
13	26	20	SX48F	弥生土器	甕		良	横走平行比施文(2条1幅半 竹管状工具)			
13	27	20	EKGIV-V層	弥生土器	甕		良	横走平行比施文2段以上、その下位に下陥深窪文(2条1幅半 竹管状工具)			
13	28	20	11-10G-IV層	弥生土器	甕		粗	横走平行比施文(2条1幅半 竹管状工具)			
14	1	20	A区南半IV層	土師器	甕		粗	磨滅している	擦痕折り返し接合痕、ナダ		
14	2	20	A区南半V層	土師器	甕(受け部)		良	磨滅している		口径7.9	
14	3	20	A区南半VI層	土師器	甕		粗			底径6.9	底部削紙 2.2mm
14	4	20	10-10G-IV層	土師器	高环(脚部)		精良	ミガキ	ヘラナデ	底径9.6	
14	5	21	EKS	土師器	甕		粗	ナデ	ナデ	口径(15.9)	
16	1	21	ST1F	土師器	甕		良	ロクロナデ	黒色処理・ミガキ	口径(15.2)	
16	2	21	ST1-EL22	土師器	甕		良	ロクロナデ・底部切切り		底径(9.6)	
16	3	21	ST1-F	須恵器	甕	粗0.3cm 大輪入		ロクロナデ・底厚切切り	ロクロナデ	底径8.0	
16	4	21	ST1-F	須恵器	甕			ロクロナデ・鋸用刃底部余切り	ロクロナデ	底径(7.0)	
16	5	21	ST1-F	須恵器	甕			ロクロナデ・底厚余切り	ロクロナデ	口径(14.0) 底径66 高さ37	
16	6	21	ST1-F	須恵器	甕			ロクロナデ・底余切り	ロクロナデ	口径(13.6) 底径55 高さ45	
16	7	21	ST1-F	須恵器	甕			ロクロナデ・底部余切り	ロクロナデ	口径(13.5) 底径(64) 高さ(45)	
16	8	21	ST1-F	須恵器	甕	高台付		ロクロナデ・底部余切り	ロクロナデ	口径84 高さ46	
16	9	21	ST1-F	須恵器	甕						
17	1	21	ST1-F	須恵器	甕			ロクロナデ	ロクロナデ	口径(22.2)	
17	2	21	ST1-F	須恵器	甕			ロクロナデ	ロクロナデ		
17	3	21	ST1-F	須恵器	甕			ロクロナデ	ロクロナデ	底径84 高さ46	
17	4	21	ST1-F	須恵器	甕			タテキ	アチ		
17	5	21	ST1-EL22	土師器	甕			刷毛目	刷毛目	底径84 高さ45	RP8+9
17	6	21	ST1-F	土師器	甕			刷毛目	刷毛目	口径(22.2)	
17	7	21	ST1-EL22	土師器	甕			刷毛目・底部木葉痕	刷毛目		RP9
17	8	21	ST1-EL22	土師器	甕			刷毛目・底部木葉痕	刷毛目	底径100	RP7
17	9	21	ST1-EL22	土師器	甕			刷毛目・底部木葉痕	刷毛目	口径(22.2)	RP9・底部穿孔?

表4 石器計測表

辨 回 番 号	遺 物 番 号	回 収 番 号	器 標	出 土 位 置	石 材	法 量 (mm)			重 量(g)	備 考
						長・共幅	幅・短幅	厚		
10	8	19	磨製石斧	ST13-F1	花崗岩	57.5	31	13	37.12	
10	11	19	石刀	ST14-F	安山岩	96	71	55	514	側底
10	12	19	石刀	ST14-F	安山岩	147	(53)	(65)	832	側底
10	20	19	石刀	ST17-F	花崗岩	96.5	95.5	43	836	
10	26	19	石刀	ST19-F	珪質頁岩	83	37	10	23.52	
10	33	19	磨製石斧	ST23-EP37	花崗岩	95	43	22	167.75	RP18
11	8	19	石刀	ST41-Y	花崗岩	99.5	89	57	667	側底
11	9	19	石刀	ST41-Y	安山岩	111	85	72	836	側底
11	10	19	石刀	ST41-F	花崗岩	104	84	69	864	側底
11	12	19	石刀	ST43-EL44	花崗岩	87	65	62	547	側底
11	18	19	石刀	ST45-F	珪質頁岩	74	25	12	17.09	
11	19	19	石刀	ST45-EL44	安山岩	118	117	64	1383	磨底
11	20	19	石刀	ST45-F	安山岩	96	94.5	64	576	磨底
11	21	19	石刀	ST45-F	珪質頁岩	(23)	27	64	6.75	
11	22	19	タケキ石	ST45-F	安山岩	115.5	65	29	224	
12	23	19	石刀	SK4-F	磨製石刀	35.5	55.5	12	18.75	RP17
12	24	19	スクリューバー	BGS-FV	ナット?	21.5	29.5	6	4.02	
12	25	19	磨器	BGS-FV	磨質頁岩	65	43	18	23.65	
12	26	19	磨石	8-18G	珪質頁岩	128	66	40	483	RQ20

IV まとめ

1 遺跡の性格と年代観

今回の調査では、縄文時代・弥生時代・平安時代の遺構と遺物、古墳時代・江戸時代の遺物が出土している。今回の調査の結果、当遺跡を考える上でカギとなる河川跡の流路方向と埋没時期の大まかな特定が可能となった。第1～5次の各調査区に囲まれるように中央部が未調査となり、そこを河川跡が流れていると推定される。今後の課題は各時代の遺構（集落）と河川跡との関わり方の解明である。中央の河川跡沿いの調査が待たれる。なお、今回の遺物出土箱数は22箱を数える。

縄文時代

竪穴住居跡19棟、土坑12棟、埋設土器1基、河川跡が検出されている。第4次調査で検出されている河川跡が、北東から南西に流れることが分かった。その流路に規制されるように集落が営まれている。竪穴住居跡の在り方は、これまでの調査成果とほぼ一致している。遺物は、土器・土製品・石器が出土している。第4次調査の報告書において、大木10式期に属する土器を「古段階」「中段階」「新段階」の三つの時期に類型化が行われている。今回の調査では、良好な一括資料や切り合い等には恵まれていないが、前述のように複式炉埋設土器と住居跡覆土にその変遷を理解できる資料が出土している。遺構の時期は、出土土器から大木10式期の古～新段階に収まるものと判断される。

以上、第4次調査で明らかにされている縄文時代中期末葉大木10式期の集落が、河川跡右岸北西および左岸南西に広がっていたことを確認することができた。なお、第1次調査では、縄文時代晚期の遺構が第5次調査区北東に隣接して検出されているが、今回の調査ではそのつながりを確認することができなかつた。

弥生時代

不整形を呈する落ち込み遺構1基が検出されている。当該期の遺物は、ほとんどが落ち込み遺構からの出土である。第2次調査においては、第5次調査区の東側で壺形土器が横位に埋設された土坑が検出されている。壺形土器は桜井式土器に併行すると理解されている。今回の調査においても2条1描の半截竹管状工具による平行沈線を特徴とする土器片が出土している。2次調査検出土坑の周辺にはピット群も確認されているが、生活の場は不明であった。今回の調査においても、出土遺物が小破片であり、遺構も不明瞭のため、桜井式期併行の生活の場の解明は課題として残った。

古墳時代

遺物は少量であり摩滅している。塩釜式土器併行の竪穴住居跡が、第4次調査では河川跡右岸で、第1・2次調査区では河川跡左岸で確認されている。第5次調査区においては古墳時代の包含層(IV層)が河川跡に向かって傾斜する堆積を示している。生活の場に成り得ない地形であったことが推定される。

平安時代

豎穴住居跡8棟・土坑5基を検出している。縄文時代から古墳時代まで窪地状の地形を示していた上位に疊層の堆積が認められる。その疊層を掘り込んで当該期の豎穴住居が構築されており、河川の流路が平安時代以前に変わっていることを物語っている。これまでの調査で8世紀中葉から10世紀前葉の集落の存在が明らかにされている。住居跡はいくつかのまとまりを示しながらも、調査区のほぼ全域に認められる。

江戸時代

遺構は検出されず、攪乱層から遺物（図版19）が出土している。遺物は陶器壺体・磁器碗・皿・蓋である。肥前系碗は三角形を作り出す高台から17世紀前半の年代が想定される。当遺跡周辺は、最上氏時代山形城下絵図によれば「上ノ山兵部太浦下ヤシキ」周辺に当たる。少量の遺物であるが、山形城の城下町を考古学資料から解明する第一歩となる。

2 山形西高敷地内遺跡の複式炉

当遺跡からは縄文時代中期末葉大木10式期の豎穴住居跡が78棟検出されている。これまで検出された複式炉は26基であるが、住居の重複による破壊等を加味すると、數はさらに増ええると思われる。構造は、土器埋設部・石組部・前庭部からなり、上原型複式炉を基本とする。

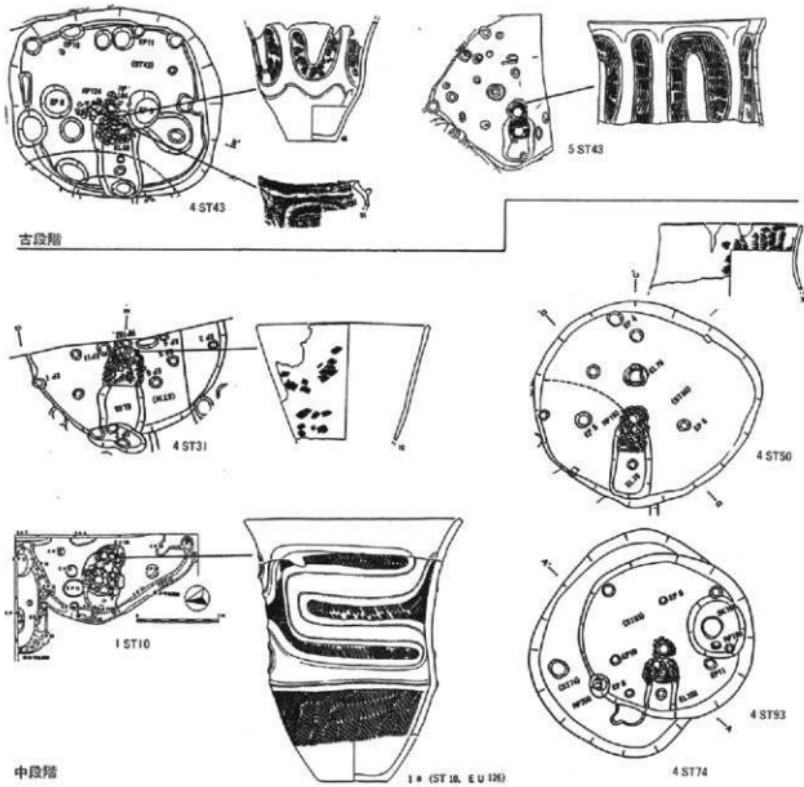
複式炉は、東北地方南部を中心に縄文時代中期末葉大木9式から大木10式期に盛行する。初現は大木8b式から同9式の間とされ、縄文時代後期には再び単純小型化し地床炉・石囲炉に戻る。複式炉は、その特異な形態と共に、一気に拡大し消滅するその在り方に解明されない点が多い。当遺跡の縄文時代の集落は、複式炉の盛衰に重なるように大木10式期に収まる。限られた期間に営まれた当遺跡において、その変遷の分析は複式炉の機能や複式炉を必要とする生活の変化を理解する糸口になると見える。ここでは、大木10式期の古から新段階への変化を提示する。複式炉の時期については、埋設された土器に基づくが、転用されている可能性もあり、住居構築の時期との関連については検討の余地を残している。

古段階では、土器埋設部・石組部・前庭部が明瞭で平面形はグルマ形を呈する。石組部は丁寧な石組みが行われている。中段階になると土器埋設部と石組部が連続するようになり、前庭部が発達するものがある。この段階では丁寧な作りはまだ残されている。新段階になると石組部と前庭部の掘り込みが伴わないもの、前庭部が壁から離れて小型化しているものが出現する。石組部の残っているものは、石組とは言い難い粗雑な状況である。古から新段階の変化は、不定形化・粗雑化・小型化である。しかし、よくみると土器埋設はほとんど変化せず、法量の変わらない深鉢形土器が、住居のほぼ中央に埋設され続ける。火気を受けた痕跡は土器埋設部と石組部の一部に認められ、前庭部には全く無い。変遷から機能を理解しようとする際、次の2点が重要であると考える。①火気を用いた土器埋設部は形状と位置を変えないのに対し、石組部と前庭部、特に前庭部が姿を変えている。②大

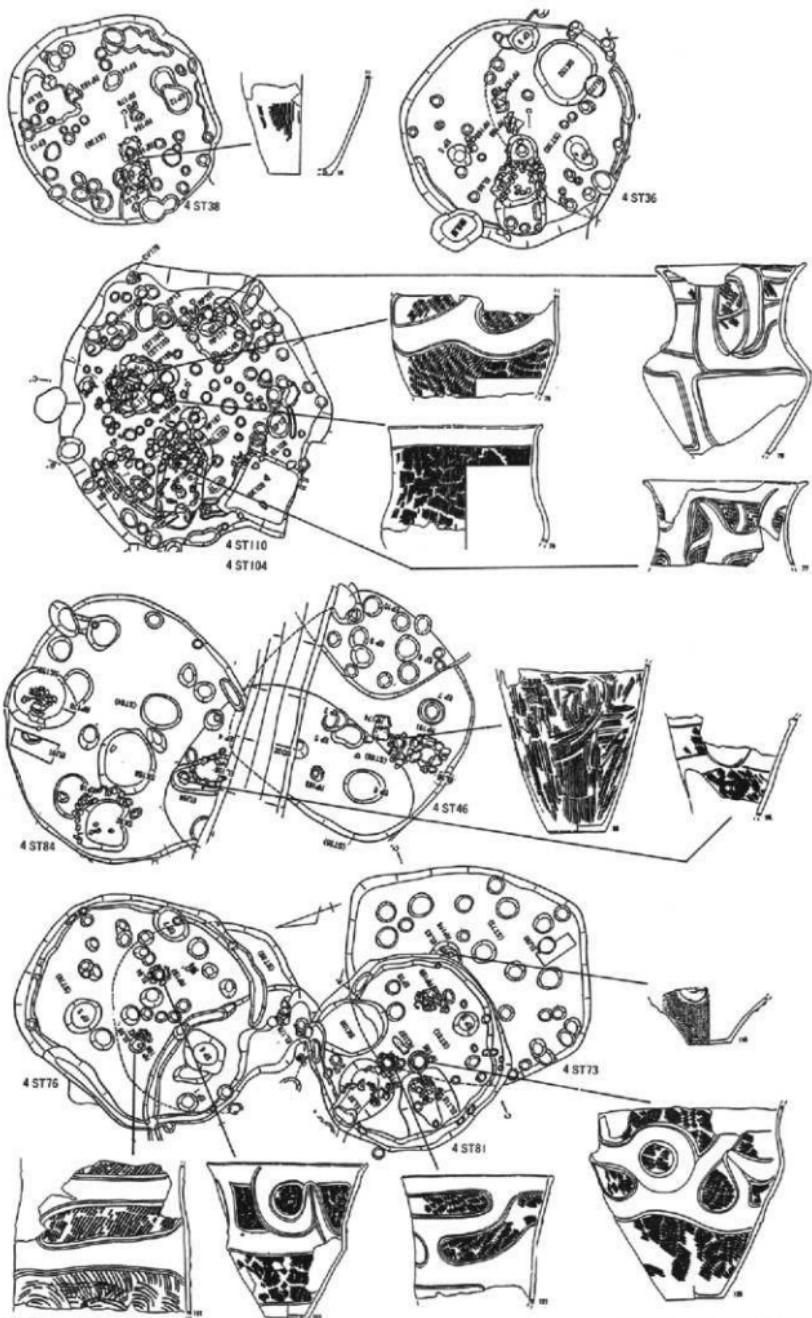
木10式期古段階は大木9式新段階から引き続き石組部と前部が精緻に作られている。以上の2点について、今後は他遺跡・他地域との比較のなかで検討して行きたい。

（主な参考文献）

- 梅宮 茂 1974 「複式炉文化論」「福島考古」第15号
 丹羽 茂 1974 「福島県における縄文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」「福島考古」第15号
 山形県教育委員会 1979 「熊ノ前遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第16集
 山形県教育委員会 1979 「山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第17集
 山形県教育委員会 1985 「山形西高敷地内遺跡第3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第91集
 財団法人歴上義光歴史館 1990 「山形県城郭古絵図異図録」
 山形県教育委員会 1992 「山形西高敷地内遺跡第4次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第173集
 山形県教育委員会 1992 「山形西高敷地内遺跡第5次調査説明資料」



遺構 S = 1 : 120 埋設土器 S = 1 : 8 第18図 複式炉の変遷図(1)



第19図 複式炉の変遷図(2)

新段階

図 版



調査区全景（東から）



下面完振状況（南東から）



鍵入式風景



トレンチ調査作業状況



表土除去実施状況



C区調査状況（南から）



上面調査状況（南西から）



基本層序 ST 2 北壁部分（南西から）



基本層序 a-a' + b-b' 部分（北東から）



C区西壁土層断面（北東から）



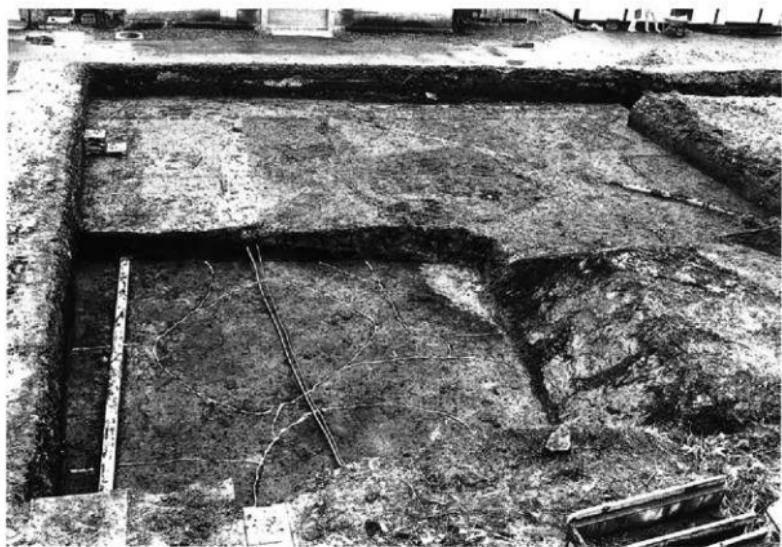
C区東壁土層断面（北西から）



D区北壁土層断面（南東から）



E区東壁土層断面（南西から）



A区下層・B区上層遺構検出状況（東から）



B区上層遺構完掘状況（南から）



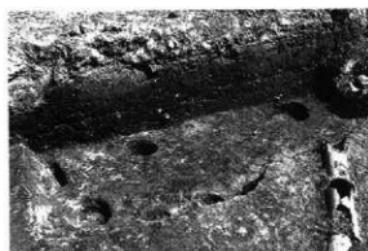
S T 1 住居跡完掘状況（北から）



S T 1 住居跡埋土状況（北から）



E L 22カマド完掘状況（北から）



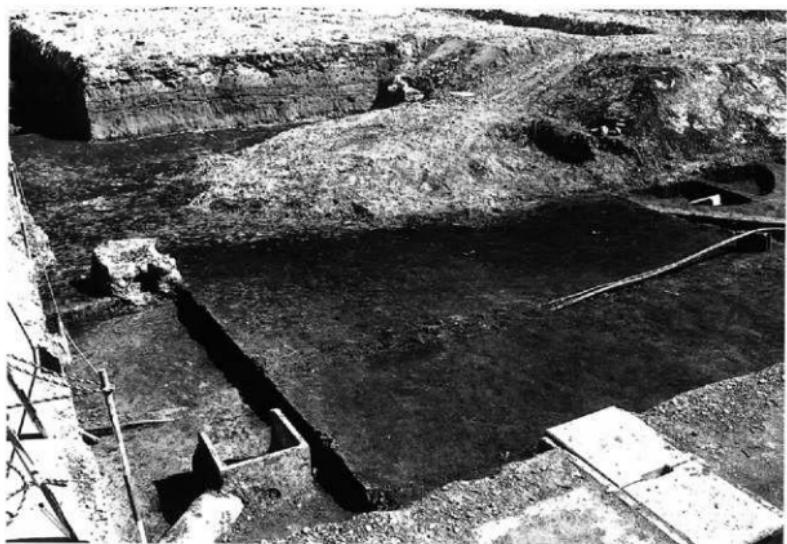
S T 2 住居跡完掘状況（南西から）



S K 3 土坑埋土状況（西から）



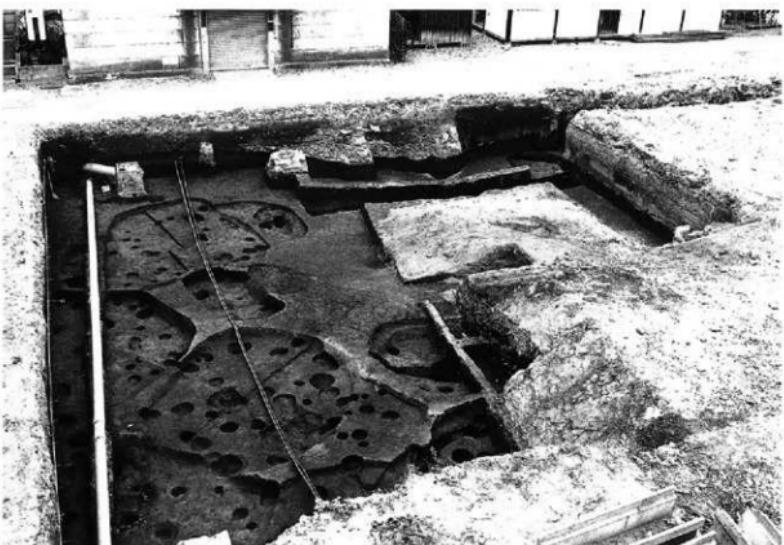
B区IV層面までの掘り下げ状況（北西から）



B区IV層面検出状況（南西から）



B区下層面整理作業状況（南東から）



B区下層完掘状況（南東から）



C区完掘状況（南から）



D区完掘状況（東から）



E区完掘状況（北から）



旧河道掘り下げ状況（南から）



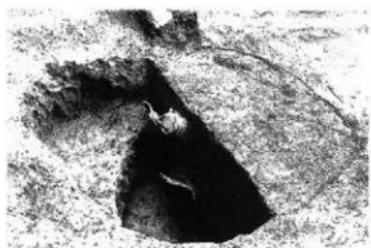
S T 41・42・50住居跡完掘状況（南から）



E L 60炉跡完掘状況（東から）



E L 60炉跡半截状況（南から）



S K 49土坑半截状況（北から）



S K 49土坑完掘状況（南から）